

## 第Ⅱ部 「学習障害」の青年の職業上の諸問題 —事例に基づく検討—

### 第1章 職務遂行能力について —— 入職準備の過程にある事例が示唆すること ——

「学習障害」児は、学校を卒業すれば、好むと好まざるとに関わらず社会へ送り出される。卒業を目前としながらも通常学級には適応できず、卒業後の進路を検討する手段を持たない「学習障害」児にとって、将来の見通しを立てることは難しい。しかし、本人の気持ちの成熟とは別に、親としては、卒業後の生活を思案しないわけにはいかない場面である。「学校ではうまくいかなかったが、会社勤めであれば、学校と違ってうまくいくのだろうか」「どんな仕事ができるのだろうか」「その仕事では給料分の働きができるのだろうか」「働くことの厳しさがわかっているのだろうか」「働いてもらう給料で自立できるのだろうか」「上司や同僚とつきあっていくことができるのだろうか」「何よりも8時間労働に耐えられるのか」などなど、親の不安はつきない。

確かに、苦手な科目にも挑戦しなければならない学校時代に比べれば、得意なことで生計を立てていくことができる社会は、ストレスが少ないと思えるかもしれない。しかし、そこは生産性を問う社会でもある。したがって、社会の期待に応えることができる場合には、自信もプライドも保たれ、学校時代の経験を「不遇だった」過去にすることができるかもしれない。しかしまた、期待に応えることができない場合、学校時代にも増して「厳しい」現実と未来が待ち受けているといえなくはないのである。

こうした青年期の職業選択の課題に直面した親と子にとって、どのような課題解決の方法があるのだろうか。学校の進路指導の課程にそって行くのであれば、学校は、生徒が自己理解を深め、職業の世界を理解し、啓発的な経験によって進路希望を確認し、職業相談を通して希望する進路先（例えば会社）を獲得するという手続きを踏んで、自らの職業生活設計を描くことを指導する。しかし、学校適応に問題があれば、指導を受けることもまた困難になる。

このような経験を持つ「学習障害」児の場合、まずは、何よりも自己理解を深める（ここでは障害理解を深める）ための資料が必要となろう。つまり、職業適性を知り、それがどのような職務と対応するのかについて検討されなければならないだろう。また、本人の関心や自信のある領域もまた進路指導の手がかりとして重要である。特に、認知等の基礎的な能力に困難があるとすれば、その点についても明らかにしなければならないだろう。例えば、視知覚認知と行動特性との関係を知り、人との関係の中で職務を遂行していく際の問題は重要な検討課題のひとつであり、加えてコミュニケーションについても検討しておかなければならない。

われわれは、通常の職業自立のための支援で入職を考えつつ、職業リハビリテーションの支援も考慮に入れようとする親子に提供する資料を作成するにあたり、一般職業適性検査やレディネステストに加え、職業リハビリテーションの充実のために検討を重ねている評価を加えていくことにした。限られた

時間の中で、検査に対する耐性の個人差を勘案しながらも、「学習障害」児の特徴を比較検討することができるよう、共通の検査を実施することを心がけた。ここでは、入職前の生徒の検査結果を、①一般職業適性検査、②ベンダー・ゲシュタルト・テスト、③音声並びに表情からの感情識別検査、④職業レディネス・テスト、⑤軽度注意能力障害検査、の順に紹介する。こうした枠組みで作成することができた資料を紹介することで、入職前の青年の特徴を検討することにしたい。

なお、ここでいう「学習障害」児は、医療機関等で「学習障害」の診断を受けた者、相談機関等で学習障害といわれたことのある者、その他、「学習障害」関係団体（親の会やフリースクール等）に所属、もしくは活動経験のある者などで、厳密には「学習障害を主訴とする」者である。

## 第1節 職業適性検査（GATB）について

労働省編一般職業適性検査（事業所用）は、紙筆検査と器具検査とから構成されており、9種の適性能（知的能力：G、言語能力：V、数理能力：N、書記的知覚：Q、空間判断力：S、形態知覚：P、運動共応：K、指先の器用さ：F、手腕の器用さ：M）を測定するものである。

検査結果については、個々の事業所が用意する適性能の基準と照合することによって、採用選考や適性配置、教育訓練等の雇用管理のための資料を作成するわけであるが、ここでは、標準的な「職業群別適性能基準表」に基づいて分析した。

- G：知的能力……説明・教示や諸原理・諸概念を理解したり推理し、判断したりする能力
- V：言語能力……言語の意味およびそれに関連した概念を理解し、それを有効に使いこなす能力、  
言語相互の関係および文章や句の意味を理解する能力
- N：数理能力……計算を正確に速く行うとともに、応用問題を解き、推論する能力
- Q：書記的知覚……文字や数字を直感的に比較弁別し、違いを見つけ、あるいは構成する能力、  
文字や数字に限らず、対象をすばやく知覚する能力
- S：空間判断力……立体形を理解したり、平面図から立体形を想像したり、考えたりする能力、  
物体間の位置関係とその変化を正しく理解する能力、設計図を読んだり、幾何学の問題を解いたりする能力
- P：形態知覚……物体あるいは図解されたものを細部まで知覚する能力、図形を見比べて、その形や陰影、線の太さや長さなど細かい差異を弁別する能力
- K：運動共応……眼と手または指を共応させて、迅速かつ正確に作業を遂行する能力、  
眼でみながら、手で迅速な運動を正しくコントロールする能力
- F：指先の器用さ…速く、しかも正確に指を動かし、小さいものを巧みに取り扱う能力
- M：手腕の器用さ…手腕を思うままに巧みに動かす能力、物を取り上げたり、定められた位置関係で正確にすばやく持ち替えたりするなど、手腕や手首を巧みに動かす能力

【労働省編一般職業適性検査事業所用（手引）より】

以下では、労働省編一般職業適性検査事業所用（手引）にしたがって、検査の特徴を紹介する。

## 1. 適性能得点が示すこと

検査が示す適性能得点は標準化されており、実施、採点、結果の整理等の手続きは客観的に定められている。したがって、適性能得点により個人の能力を9つの異なった側面から多角的に理解できる。

得られた適性能得点から適性能プロフィールを描いてみることにより、個々の適性能の特徴をとらえることができる。プロフィールは、個々の適性能を数値で比較するだけでなく、相対的な特徴を明確に示すものである。9つの適性能のすべてが同じようなレベルの得点をとることは少なく、いくつかの性能で突出して高く、いくつかの性能で突出して低いことが視覚的に理解できる。

また、認知機能群（G、V、N、Q性能）と知覚機能群（S、P性能）、運動機能群（K、F、M性能）にわけて3つの機能群の中で、優れている群とそうでない群に大別し、個人の適性能の特徴を理解することもある。

適性能の程度	能力分布上の意味	基準点
A段階	上位10%以内	125
B段階	上位11~30%	110
C段階	上位31~50% = 平均以上	100
D段階	上位51~70%	90
E段階	上位71~90%	75
F段階	下位10%以内	—

## 2. 「職業群別適性能基準表」による適性評価

標準的な「職業群別適性能基準表」とは、さまざまな職業を作業の内容、複雑さ、困難さなどについて分析し、その最も重要とされる適性能とその所要水準の組み合わせによって分類し、さらに産業界における職場環境等の類似性を考慮して編成したもので、8領域・40職業群で構成されている。

この基準表では、40職業群別に、その職業を遂行する上で必要な適性能の標準的基準点が設けられている。この基準点は、40職業群のそれぞれに含まれる多数の具体的職業の一つ一つについて、あらかじめ職務の分析を行い、さらに従業者に必要な性能分析を行った結果を比較検討し、概括して理論的標準的基準点として設定されたものである。したがって、個人に特徴的な適性能のパターンをこれに照合することにより、個人が有している適性能力が発揮しやすい職業分野とそうでない分野について手がかりが得られる。

この基準表が対象としている職業は、芸術芸能および事業主、監督的職業以外の職業であるから、いわば、企業内のほとんどの職業はこの領域、職業群のどこかに含まれる網羅的は職業体系とみるこ

とができる。したがって、多くの職務に関して職業適性を評価したい場合には、この基準表をそのまま利用することができる。しかし、あくまでも基準の目安を示すものであり、個々の事業所の具体的な職種については、独自の所要適性能と基準点を要求することがある点に注意が必要である。

職業群別適性能基準表 — 8 領域40職業群 —

〈参考〉

職業群名	適性能									
	知的	言語	数理	書記	空間	形態	共通	指先	手腕	
	G	V	N	Q	S	P	K	F	M	
	適性能得点	86	110	122	95	69	75	125	103	128
	加算評価	+10 96	+10 120	+10 132	+10 105	+10 79	+10 85	+10 135	+10 113	+10 138
職業群名	G	V	N	Q	S	P	K	F	M	
専門的・技術的職業	A-1 自然科学系の研究の仕事	125		125		100				
	A-2 工学、技術の開発応用の仕事	110		110		100				
	A-3 人文科学系の研究の仕事	125	125	100						
	A-4 診断、治療の仕事	125		125		100				
	A-5 養護、看護、保健医療の仕事	100			90				90	
	A-6 相談助言の仕事	110	100	100						
	A-7 法務、財務等の仕事	125	125	100						
	A-8 著述、編集、報道の仕事	110	110		100					
	A-9 教育・指導の仕事	110	110		100					
	A-10 教習、訓練、指導の仕事	100	100		100					
	A-11 デザイン、写真の仕事					90	90			
	A-12 測定、分析の仕事			90		90	90			
事務的職業	C-1 専門企画の仕事	110	100	100						
	C-2 一般事務の仕事	90	90		90					
	C-3 経理、会計の仕事	90		90	100					
	C-4 簡易事務の仕事				75			75		
	C-5 事務機器操作の仕事	75			90			90		
販売の業	D-1 専門技術的な販売の仕事	110		100		100				
	D-2 販売の仕事	75		75	75					
サービスの業	E-1 理容、美容の仕事					75	75		75	
	E-2 個人サービスの仕事	75			75					
	E-3 介護サービスの仕事	75							75	
保安の業	F-1 警察、保安の仕事	75			90				75	
	F-2 警備、巡視の仕事	75			75					
農林・漁業	G-1 動物の調教・管理、水産養殖、園芸の仕事	90	75							
	G-2 動植物の採取、飼育、栽培の仕事								75	
運送・交通職業	H-1 航空機、船舶の操縦の仕事	110		110		100				
	H-2 通信の仕事	90			90			90		
	H-3 車両等の運転の仕事	75			75				75	
技能工・製造・建設・労務の職業	I-1 製図および関連の仕事			90		90	90			
	I-2 手工技能の仕事					90	90		90	
	I-3 切削加工、造形の仕事					90	90		75	
	I-4 機械操作の仕事							75	75	
	I-5 加工、組立の仕事						90	75	75	
	I-6 機械、装置の運転監視の仕事	90			90				75	
	I-7 電気設備、機械設備の保守管理の仕事	90			90				90	
	I-8 据付機関、建設機械の運転の仕事					75	75		75	
	I-9 建設、設備工事の仕事					75	75		75	
	I-10 手腕作業主体の仕事						75		75	
	I-11 身体作業主体の仕事							75	75	

(注) A～Iのアルファベットは、労働省編職業分類の大分類符号に対応させたものである。

この表中の適性能得点は測定値であるため、評価の検討に際しては、検査実施時点におけるコンディションや検査場などの環境的な要因による測定誤差の影響を配慮しなくてはならない。個人の可能性と職務との関係を把握するという、この検査の実施の目的に鑑み、能力がありながら発揮できなかったかもしれない状況を考慮することが必要となる。こうした立場から、実際の得点を解釈するときには測定誤差を加算することを通例としている。加算点を10にするか、厳しく5にするか

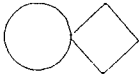

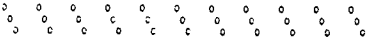

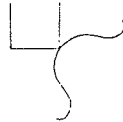

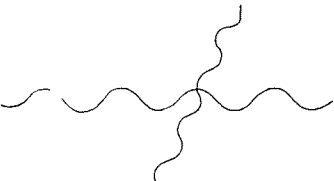
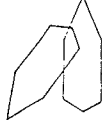

は、測定にともなう誤差をどのように考えるかによるものであり、利用者の判断にまかされているが、検査記録表においては加算点を1標準偏差分(10)として表示している。

なお、この検査は制限時間内での作業量によって能力を把握するという方式をとっているため、作業の巧緻も検査結果に微妙な影響を与えることがある。検査の適用範囲は、原則として15歳～45歳であるが、特に年齢が高い場合、あるいは年齢の低い層で発達における個人差の問題がある場合などがそれにあたる。また、知的な発達に遅れのある場合には、別の職業評価の枠組みが適用されることがある。

## 第2節 ベンダー・ゲシュタルト・テストについて

ベンダー・ゲシュタルト・テストは、9個の幾何図形を被験者に「模写」させて、それを一定の基準にしたがって処理し分析するものである。開発者であるベンダーは、「図形を知覚し、模写する過程では主として次の2つの要因が働くとする。1つは、脳の発達の未成熟や脳損傷などによる個人の成長・発達の型と成熟水準の要因。もう1つは、自我機能の要因である。つまり、自我機能の異常が図形の認知に影響を及ぼし、そのことが模写に反映されるとするものである（今野・内田・鈴木、1994）」。

ベンダー・ゲシュタルト・テスト図形

<p>図形A</p> 	<p>図形I</p> 	<p>図形II</p> 
<p>図形III</p> 	<p>図形IV</p> 	<p>図形V</p> 
<p>図形VI</p> 	<p>図形VII</p> 	<p>図形VIII</p> 

したがって、ベンダー・ゲシュタルト・テストは、①視覚-運動的なゲシュタルト機能の成熟と発達に関する検査、②人格検査、の両面を併せ持っている。ベンダー・ゲシュタルト・テストは、こうした複数の観点からの利用が可能であることから、採点の仕方についても種々の方法がある。ここでは11才以上の児童と成人のための採点として最も多く用いられているパスカル&サッテル法を用い、併せてハットの解釈を用いることとする（ハットの解釈については、細部についてまで十分に研究されつくされているとはいえないが、その解釈は示唆に富んだものである）。

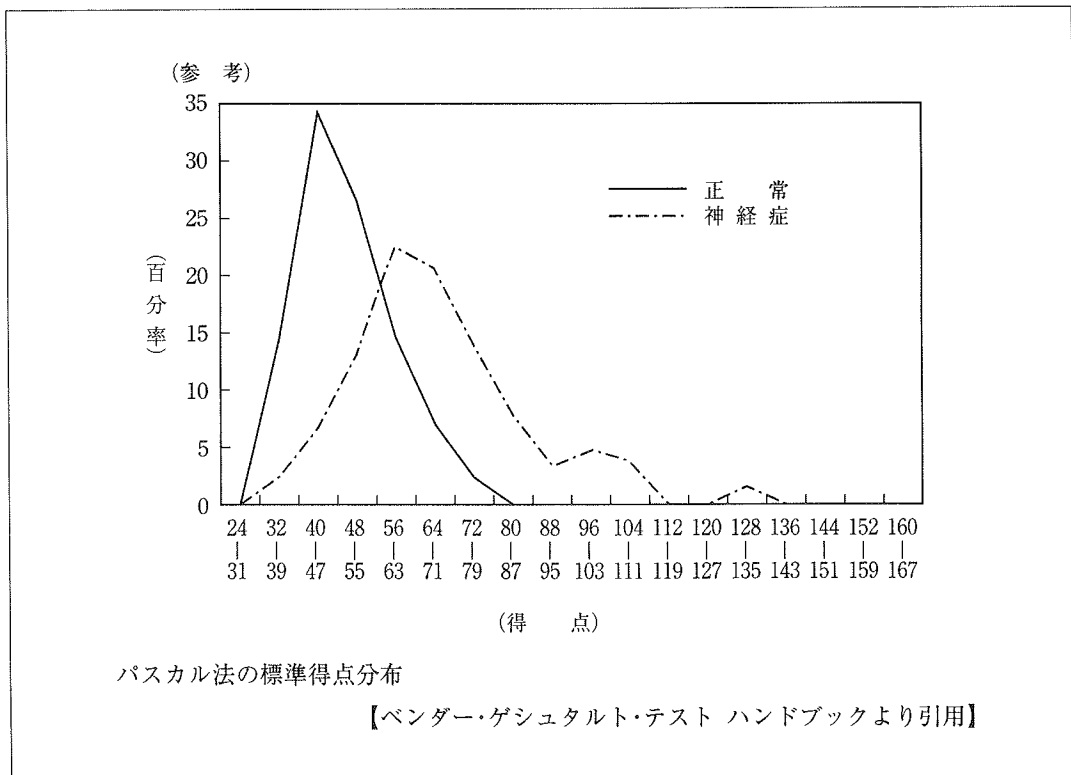
## 1. 得点が示唆すること

パスカル&サッテルの採点は各図形についての採点と全体の構成による採点からなる。

### パスカル&サッテルによる採点

得点項目	採点対象となる図形
ボツ点・小円 -----	
(1)ボツ点, ダッシュ, 小円の混在	図形 I III V
(2)ダッシュに変形	図形 I III V
(3)小円に変形	図形 I III V
(4)ダッシュまたはボツ点に変形	図形 II
(5)ボツ点の数の過不足	図形 I III V
(6)小円のふるえ, 変形	図形 II
(7)小円の接触	図形 II
ボツ点・小円・線 -----	
(8)波状になっている	図形 I II
(9)行列が2行になる	図形 I
(10)2線に描かれる	図形 II
行列 -----	
(11)小円の列の誤り	図形 II
(12)縦の行列の過不足	図形 II
(13)傾斜の逸脱	図形 II
(14)余分の矢の行	図形 III
接触・交錯 -----	
(15)弧線と方形のずれ	図形 IV
(16)弧線の回転	図形 IV
(17)弧線と方形の重複, 不接触	図形 IV
(18)ボツ点からの外延	図形 V
(19)外延の回転	図形 V
(20)交叉点のずれ	図形 VI
(21)端の不接合	図形 VII VIII
曲線図形 -----	
(22)弧線の切断	図形 IV
(23)弧線のちぢれ	図形 IV
(24)波状の角ばり	図形 VI
(25)余分な波状	図形 VI

非対称 -----	
(26)非対称	図形Ⅲ VI
(27)弧線の非対称	図形Ⅳ V
角 -----	
(28)角度のない矢	図形Ⅲ
(29)角度の欠如	図形Ⅶ VIII
(30)不必要な角	図形Ⅶ VIII
不必要 -----	
(31)線の二重	図形Ⅵ Ⅶ VIII
(32)不必要なポツ点, ダッシュ	図形Ⅶ VIII
(33)加筆修正	図形Ⅳ Ⅵ
(34)補助線	図形Ⅱ Ⅲ Ⅳ V Ⅵ Ⅶ VIII
(35)くり返し	図形Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ V Ⅵ Ⅶ VIII
その他 -----	
(36)太い描きすぎ	図形Ⅰ Ⅱ Ⅲ V Ⅵ VIII
(37)ふるえ	図形Ⅴ Ⅵ Ⅶ VIII
(38)回転	図形Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ V Ⅵ Ⅶ VIII
(39)図形の誤り	図形Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ V Ⅵ Ⅶ VIII
(40)歪み	図形Ⅲ Ⅳ V Ⅵ Ⅶ VIII
全体の構成 -----	
(1)図形Aの位置	} 構成
(2)図形の重複	
(3)圧縮	
(4)区分するための線	
(5)順序	
(6)無秩序	
(7)図形の不釣合	



## 2. 臨床的解釈について

ハットの解釈では、パスカル&サッテル法とは異なり個々の図形についての採点ではなく、すべての図形について、以下に記述する7因子に当てはまるものがあるかどうかという視点から解釈を行っている。

### ハットの解釈

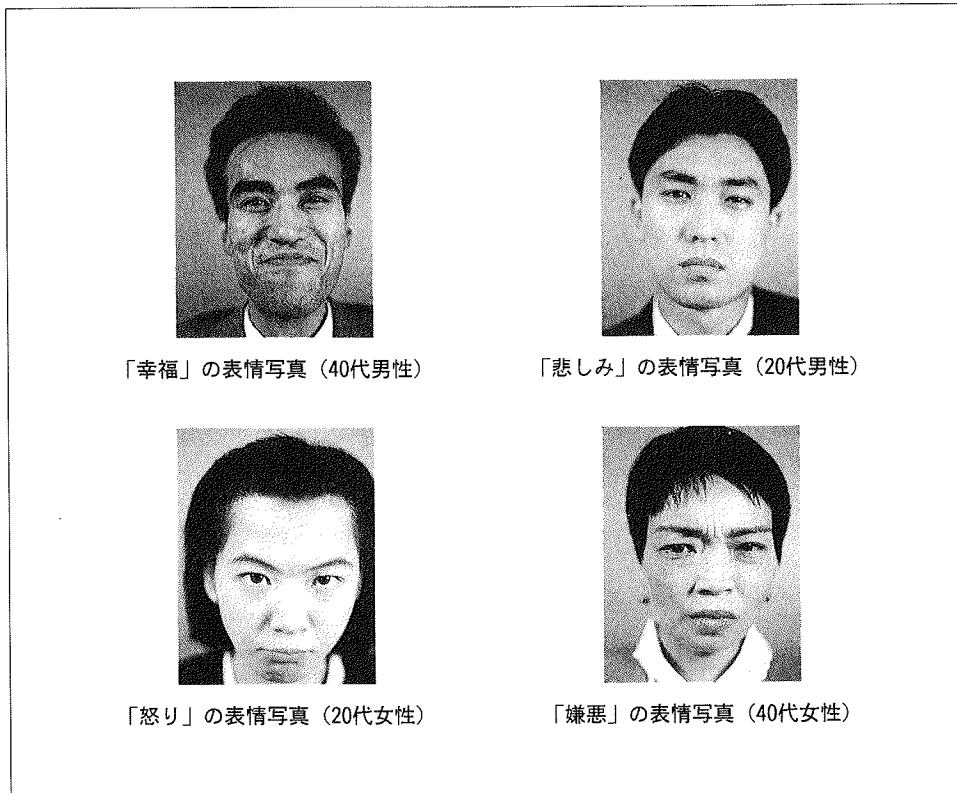
---

- 1 組織に関する因子（用紙を全体としてどのように使用するか、図形をどのように配置するかに関する因子）  
臆病，自己中心性，抑圧された敵意，不安，内的緊張などについての解釈と関連がある
  - 2 寸法に関する因子（ゲシュタルトをいかなる方法でも変化させないで，図形のサイズをどのように修飾するかに関する因子）  
不安，葛藤，忍耐性，内向性などについての解釈と関連がある
  - 3 ゲシュタルトの形の変化に関する因子  
臆病，感情の抑圧，情緒的な不安定などについての解釈と関連がある
  - 4 ゲシュタルトの歪みに関する因子  
抑圧傾向，敵対傾向，難しすぎる課題に対する無気力感情などについての解釈と関連がある
  - 5 運動に関する因子（運筆の方向や図形同士の描かれる方向の不統一に関する因子）  
葛藤，自己中心性などについての解釈と関連がある
  - 6 雑多な因子（スケッチングや固執，運動にうまく協応できないことによる不規則な線運動に関する因子）  
不安，自己統制力の弱さ，緊張，不安などについての解釈と関連がある
  - 7 被験者の作業方法に関する因子（小さい所に注意を向けすぎる，衝動的な描き方をする，補助線を引くなどの作業に関する因子）  
葛藤，忍耐性，不十全感などについての解釈と関連がある
- 

## 第3節 音声並びに表情からの感情識別検査について

日常生活の中で他者の感情を正しく識別するためには，言語的な情報だけでなく，音声や表情などの非言語的な情報を併せて利用することが望ましい。また，はっきり言葉に出されない他者の感情を適切に識別できることは，感情面での交流を豊かにするばかりでなく，自分の行動を相手の反応に応じて適切にコントロールすることを可能にする。したがって，非言語的な側面からの情報を正しく認識するためのスキルは，円滑な対人関係を維持していくために必要なスキルといえる。





ここでは、音声並びに表情からの感情識別検査（向後、1996）を用いて、他者感情の識別に関する能力を評価する。検査はビデオテープにあらかじめ録音された「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の条件毎に呈示される刺激に対して、「幸福」、「悲しみ」、「怒り」、「嫌悪」の4感情の識別を行うものである。刺激は、図に見られるように、20代、40代の男女各1名ずつによるもので、刺激総数は各条件とも性別(2)×年代(2)×感情(4)×繰り返し(2)=32である。なお、検査からは、「正答率」と「混同の傾向」が得られる。

### 1. 正答率が示唆すること

刺激の呈示条件は「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」の3通りである。これは、表情から相手の感情を識別することが苦手でも、音声からは比較的高い確率で相手の感情を識別できる、といった被験者毎の傾向を把握することをねらったものである。例えば、「音声のみ」からの他者感情の識別は正しくとも、「表情のみ」で混同する傾向が強い場合には、「音声+表情」において、「音声のみ」単独の場合よりも正答率が下がることもある。この場合、一般に言われているように、「顔をよくみて」話すことで、情報を正しく利用できない可能性がある。もちろん、いずれの条件においても健常者の平均正答率（「音声のみ」86%、「表情のみ」85%、「音声+表情」95%）を大きく下回る場合には、言語的な助けが十分に得られなければ、他者と円滑な対人関係を結ぶことに困難が予想される。

## 2. 感情の混同傾向が示唆すること

検査では、4感情のうちどの感情とどの感情を混同しやすいかといった被験者毎の「混同の傾向」についても知ることができる。混同のうち「怒り」と「嫌悪」の混同は、ともに不快な感情同士の混同であるため、対人場面で比較的問題となりにくいといえる。しかし、「怒り」や「嫌悪」などの不快な感情を「幸福」といった快の感情と混同している場合は、そのことが対人関係における不適応の原因の1つになっていると考えられる。また、ほとんどの音声や表情を「怒り」と解釈するといった、被験者毎の傾向についても知ることができる。こうした傾向からは、注意や指示に対して過敏に反応するといった行動との関連が示唆できる。

## 3. ベンダー・ゲシュタルト・テストとの関連から

視覚あるいは聴覚的な情報の認知あるいはその統合に困難がある場合、非言語的なコミュニケーションに関する情報を十分に利用できない可能性がある。また、音声及び表情と感情との関係については、一般に日常生活場面の中で自然に学習されるものであるとの認識から、そのことだけを目的とした学習をする機会は少ない。こうした学習に困難がある者の場合、情報処理と感情理解との間に十分な対応関係が成立しないまま就労の場面に至る可能性がある。

対人関係の評価では、いつでも明るく、誰とでも話せ、友人が多いことだけを良しとするのではなく、静かで、内省的で、友人が少ない場合でも本人と周囲とが互いに心地よいと感じる状態であればよく、何が望ましいとするかは社会的スキルの評価と同様、状況に依存し、一義に決定することが困難である場合が多い。こうした評価の難しさは、対人的な評価が個人の性格的な特性とも強く関連しているためである。しかしながら、状況を考慮しない行動、他者感情を考慮しない行動は、個人の性格的な特性とは関係なく望ましくない行動であるといえよう。ここで、さらに問題を複雑にしているのは、状況や他者感情を考慮しないとみえる行動が、① 状況や他者感情の理解に困難があることによる問題なのか ② 理解していたとしても、それに応じた適切な対応ができないことによる問題なのかについてわけることが難しいという点にある。もちろんいずれの場合であれ、対応が不適切なものとなり、対人関係に困難が予想される。しかしながら、指導や周囲に求める配慮は異なったものとなる。前者の場合であれば、そして、状況や他者感情の認知の困難が、もっと基本的な、例えば視覚、聴覚系の情報の認知と処理の困難であれば、その対応は本人への指導よりは主として周囲に配慮を求めるということになる。もちろん、視覚、聴覚系の情報の認知と処理に困難がない場合で、かつ、状況や他者感情の認知に困難がある場合、例えば高機能自閉症等も考えられるが、この場合でも、より広い意味において外界からの情報の認知、統合過程に困難があることには変わりがなく、対応はやはり周囲に配慮を求めるということになろう。これに対して後者の場合であれば、獲得された情報に対して適切な対応とは何かを指導することが、まず中心の課題となる。もちろん、このような場合で

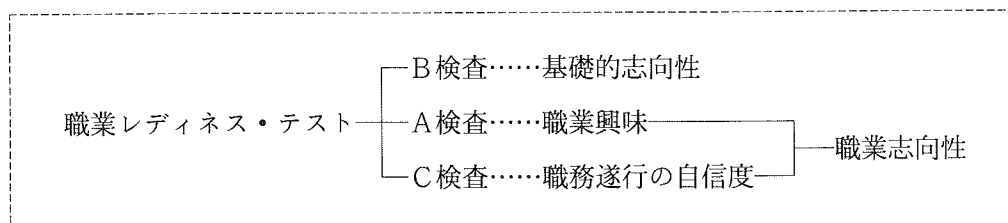
あっても、必ずしも適切な対応が獲得されるとは限らず、その場合は前者の場合と同様の配慮を求めることになる。このようにスキルに関しては、使用する状況の認知に関する問題と使用そのものの問題とにわけて評価することが必要となる。

今回は、状況の認知の問題についてベンダー・ゲシュタルト・テストとの関連で検討していく。本来は、視覚的な問題だけでなく、聴覚的な問題についても検討する必要があるが、現在までのところ、妥当性・信頼性の点で十分に検討された聴覚認知検査がないことから、ここでは視覚認知との関係から考察する。例えば、ベンダー・ゲシュタルト・テストにおいて評価が低い場合、表情の変化そのものが適切にとらえられない可能性がある。この場合、音声情報をうまく利用できず、また、「音声＋表情」の評価も低い場合は、指導よりも周囲に対して配慮を求めることになる。これに対して、ベンダー・ゲシュタルト・テストの評価が高いにも関わらず、「表情のみ」の評価が低く、さらに音声情報もうまく利用できないために「音声＋表情」の評価が低い場合には、表情のどこに注目したらよいか、感情の変化はどのような表情の変化となって表れるのかなどについて指導することが望まれる。こうした指導にも関わらず、変化が見られない場合には、やはり周囲に対して配慮を求めることになる。また、ベンダー・ゲシュタルト・テストの評価も高く、「音声＋表情」の評価も高いにも関わらず、生活場面で対人関係に問題が多いことが報告されている場合には、場面や状況に応じた行動のコントロールに困難があることが予想される。この場合には、まず、表情等から得た情報をどのように利用するかについての指導が望まれる。もちろん、こうした指導にも関わらず変化が見られない場合には、他の場合と同様に周囲に対して配慮を求めることになる。

#### 第4節 職業レディネステストについて

「レディネス」とは、準備ができていることを意味するが、職業レディネスという場合には、「個人の根底にあって、(将来の)職業選択に影響を与える心理的な構え」と定義される(日本労働研究機構、1994)。

職業レディネスには、態度的側面(職業に対する志向性、職務遂行の自信度、職業選択に対する認知のパターン、職業観など)と能力的側面(職業に関する情報の取得度、選択課題解決能力、意志決定のパターン)とが含まれる。新版 職業レディネス・テストは、上記の側面の内、態度的側面の基礎的志向性と職業に対する志向性(職業に対する興味と職務遂行の自信度からとらえる)を対象としている。以下では、職業レディネス・テスト(手引)にしたがって検査の特徴を紹介する。



このテストは、個人を特定の職業分野に向かわせる動因やその心理的構造を理解するための一つの用具であり、他の諸テストと併用することにより、進路指導の充実に貢献するものである。適用範囲は13歳～18歳程度の中学校・高等学校在生徒であるが、20歳前後であっても職業経験の浅い者や職業に対する知識が乏しい者には適用できるとしている。

## 1. 職業志向性について：A検査とC検査が示唆すること

A検査では、仕事に対する好みによる職業興味を測定する。また、C検査では、仕事に対する自信の程度を測定する。また、C検査はA検査と対照することにより職業志向性を把握できる。

興味および自信度をとらえる枠組みとして6つの職業領域を設定しているが、これは、ホルランドの理論によっている。

R領域：現実的職業領域……機械や物を対象とする具体的で実際的な仕事や活動の領域

I領域：研究的職業領域……研究や調査のような研究的・探索的な仕事や活動の領域

S領域：社会的職業領域……人と接したり、人に奉仕したりする仕事や活動の領域

C領域：慣習的職業領域……定まった方式や規則、習慣を重視したり、それにしたがって行うような仕事や活動の領域

E領域：企業的職業領域……企画・立案したり、組織の運営や経営等の仕事や活動の領域

A領域：芸術的職業領域……音楽、美術、文学等を対象とするような仕事や活動の領域

## 2. 基礎的志向性について：B検査が示唆すること

B検査では、個人の職業選択行動と密接な関連を持つとされる基礎的志向性を、日常の生活行動・意識の面から測定し、対情報関係志向、対人関係志向、対物関係志向の3つに分けている。これは、職業興味を明白に表明できない生徒の興味の把握に役立つ。

D志向：対情報関係志向……各種の知識、情報、概念などを取り扱うことに対し、個人の諸特性が方向づけられている

P志向：対人関係志向……主として人に直接かかわっていく活動に対して、個人の諸特性が方向づけられている

T志向：対物関係志向……直接、機械や道具、装置などのいわゆる物を取り扱うことに対して、個人の諸特性が方向づけられている

### 3. プロフィールが示唆すること

得点は「強い」「普通」「弱い」の3段階で解釈される。検査が示す得点は標準化されており、実施、採点、結果の整理等の手続きは客観的に定められている。

得られた標準得点からプロフィールを描いてみることにより、個々の興味や志向性の特徴をとらえることができる。プロフィールは、個々の興味や志向性の特徴を3段階で検討するだけでなく、相対的な特徴を示すものである。進路選択への態度が明確化し、自己理解が進むほど興味や志向性、職務遂行の自信度は分化するという仮定に基づいており、プロフィールに山と谷がはっきりしていると準備性ができていると解される。

標準得点	解釈上の意味
61以上	興味、志向性、自信が強い
40～60	興味、志向性、自信が普通
39以下	興味、志向性、自信が弱い

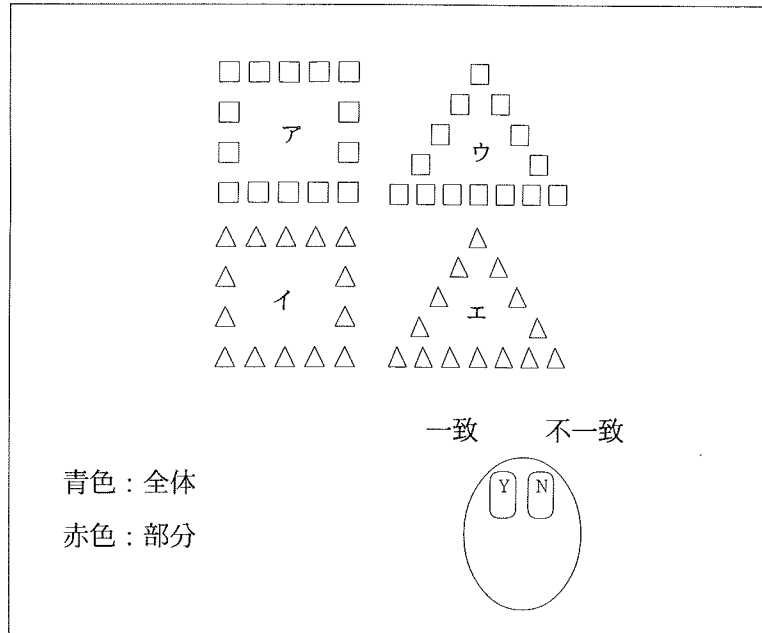
職業興味と職務遂行の得点差が大きい場合には、その領域は現実的な進路探索になりにくいですが、得点差が小さい場合、それぞれの志向性と関係する職業名のリストが示されており、個人の特徴を具体的な職業名と関連づける資料とすることができる。この検査の結果から、直ちに適職判定をすることはできないが、適性検査の結果などとあわせて進路指導に役立てることができる。

## 第5節 軽度注意能力障害検査について

「注意機能」とは、①注意の持続：繰り返し行われる活動の間、一定の反応行動を維持させる能力、②選択的注意：妨害的刺激を抑制し、標的目標に注意を集中して、行動や認知プロセスを維持させる機能、③注意の転換：異なった認知課題を交互に行う際、刺激あるいは情報処理プロセスへの注意をシフトさせる機能、④注意の配分：同時に2つ以上の課題に注意を向ける能力、の4つの特性に分けられる。

ここでは、「頭の切り替えがうまくいかない」「2つのことを同時に言われると困る」などの訴えに代表されるような、③「注意の転換」と④「注意の配分」に相当する能力を評価するために開発中の軽度注意能力検査により、注意障害の有無を評価した（田谷，1995）。

検査は、【全体】と【部分】が認知的に葛藤を引き起こすストループ課題によっており、ア)「四角でできた四角」、イ)「三角でできた四角」、ウ)「四角でできた三角」、エ)「三角でできた三角」のうちの2つが対として継時的に呈示される。被験者は2つで1対の図形を見る際、図形が青色で呈示された場合には図形全体に注目し、図形が赤色で呈示された場合には構成要素の形に注目して、全体または部分が一致しているか否かを、マウスのボタンを押し分けてYesか Noでできるだけ速く反応する。1回の試行は80試行で、測定は2回行われた。その間の色の変化は7回である。



標準値	正答率	平均反応時間
1回目	93.3±4.9%	0.800±0.164秒
2回目	96.6±1.6%	0.689±0.160秒

(ただし、標準値は健常成人10名による参考資料)

## 第6節 事例が示唆すること

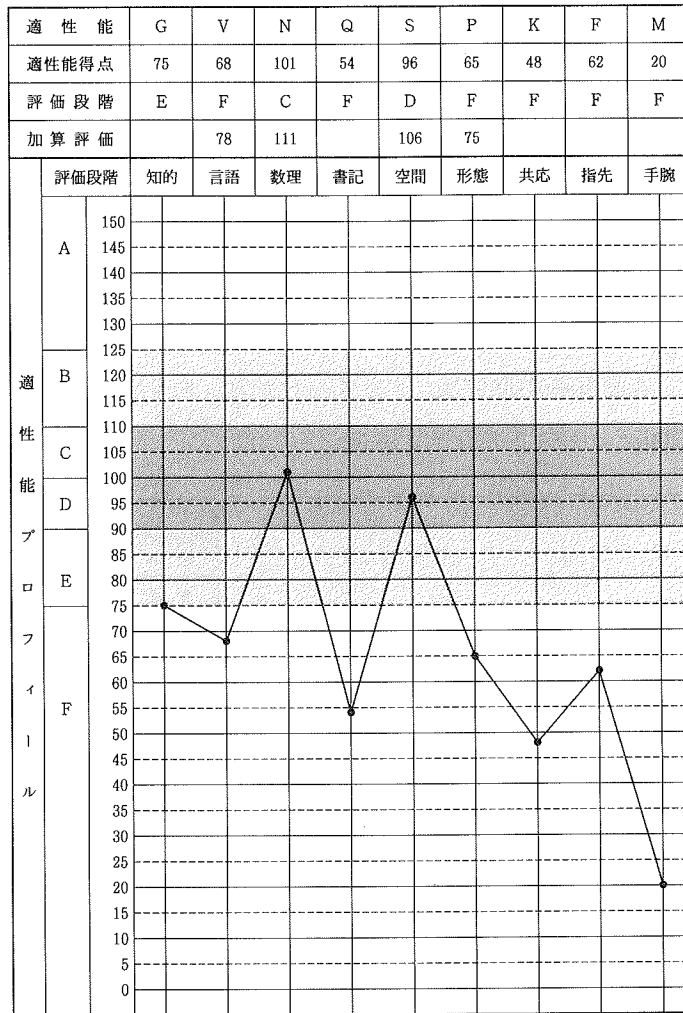
ここでは、入職前の生徒の検査結果を、①一般職業適性検査、②ベンダー・ゲシュタルト・テスト、③音声並びに表情からの感情識別検査、④職業レディネス・テスト、⑤軽度注意能力障害検査、の順にみていくことにしたい。

### 1. 事例1：17歳男子

#### (1) 職業適性について

認知機能群（G，V，N，Q性能）、知覚機能群（S，P性能）、運動機能群（K，F，M性能）の中では運動機能群が特に低い。また、認知機能群では数理が、知覚機能群では空間の適性能得点が、平均的な評価を得た以外は、すべて平均より低い。

得意な領域と不得意な領域がはっきりしているが、不得意な領域の評価が低いために、職務に必要とされている能力をすべてクリアしている職業名をあげることはできない。



ただし、加算評価は10点を加えて評価段階が上がるものについてのみ記入した。また、通常のプロフィール記入用紙は適性能得点40点以上に設定されているが、ここでは0点以上として全体像を把握できるように改訂してある。

(2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

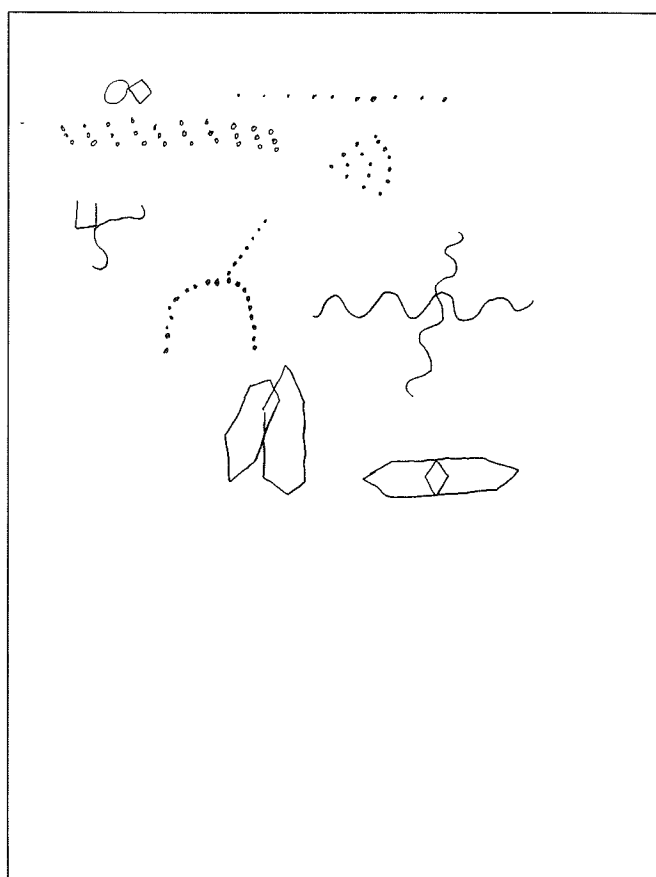
パスカル&サッテル法による得点は21点。総合計時間は5分11秒。

ハットの解釈によれば、「組織に関する因子」「寸法に関する因子」「ゲシュタルトの歪みに関する因子」から、全体的に臆病な傾向があり、場に慣れると衝動の抑制が少々はずれやすい。トレランスが弱いことから、他から言われると爆発する可能性が示唆できる。しかし、その他の4因子については特に問題は認められない。

(3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」からの他者感情の識別には困難は認められない。これに対し「表情のみ」からの識別では正答率が63%と健常者の7割強であり、若干の困難が認められる。また、「音声」の情報よりも「表情」の情報を利用する傾向が強いためか、「音声+表情」では、「音声のみ」の場合よりも正答率が低い。しかしながら、快（幸福）と不快（怒り、嫌悪）の混同は、いずれの条件においても認められないことから、状況に関する適切な言語的支援等があれば、他者の感情について誤解することは少ないといえよう。

また、「表情のみ」の正答率の低さは、ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果が健常者の範囲であることから、訓練による向上が期待できる。



提示された 音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		6		2	8	
悲しみ			8		8	
嫌悪		1	2	5	8	正答率
合計	8	7	10	7	32	84%

提示された 表情	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		6	2		8	
悲しみ			4	4	8	
嫌悪		4	2	2	8	正答率
合計	8	10	8	6	32	63%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		5		3	8	
悲しみ			7	1	8	
嫌悪		3		5	8	正答率
合計	8	8	7	9	32	78%



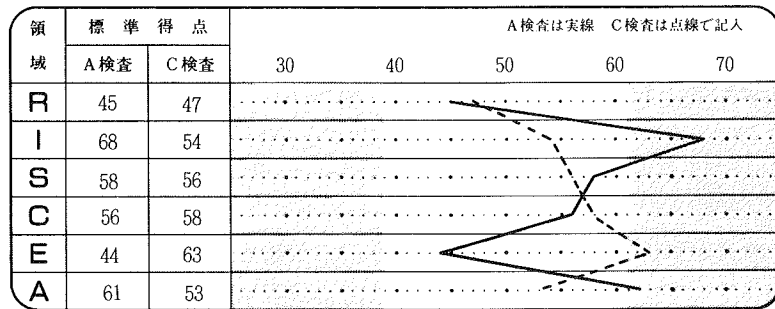
(4) 職業レディネス・テスト

【A検査とC検査の結果から】

研究的領域・芸術的領域の仕事に対する「興味」が大きいのに対し、その仕事を遂行する「自信」はそれほどでもない。また、企業的領域・現実的領域については「興味」が持てない仕事である。

関心の比較的高い社会的領域・慣習的領域に共通する仕事としては、事務関係の仕事があげられる。

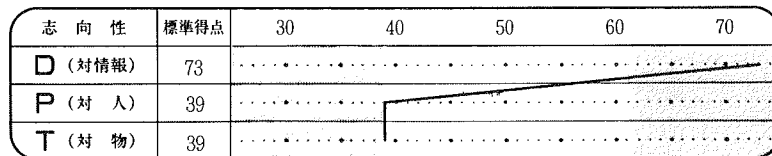
A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール



【B検査の結果から】

対情報志向が強いことが特徴である。対人志向・対物志向の仕事は苦手意識が強い。

B検査(基礎的志向性)のプロフィール



(5) 軽度注意障害は認められなかった

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解(障害理解)を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査では、職務に必要な得点をすべてクリアしている職務はなかった。しかし、適性領域であと1領域の基準がクリアできれば、可能性のある職務を見いだすことができるというプロフィールである。こうした点からみていくと、例えば基準表にしたがって、「形態」がD段階(90以上)であれば、「デザイン・写真の仕事」「測定・分析の仕事」「製図および関連の仕事」などがあげられる。また、「書記」がE段階(75以上)であれば、「販売の仕事」「個人サービスの仕事」「整備・巡視の仕事」などがあげられる。さらに、「手腕」がE段階(75以上)であれば、「介護サービスの仕事」「理容・美容の仕事」「据付け機関、建設機械の運転の仕事」「建設設備工事の仕事」「手腕作業主体の仕事」などがあげられる。

しかし、「形態」「書記」「手腕」の検査得点はいずれも低く、このままでは可能性は展望でき

ない。通常、現業部門に適性を見いだすプロフィールであるが、手指の巧緻性に困難がある。したがって、粗大運動の軽作業であれば、配慮により就職可能性が見いだせるかもしれない。もしくは、社会性の面で問題がなければ「販売の仕事」や「個人サービスの仕事」をめざして準備することが合理的である。しかし、他者との感情の交流において若干の困難が認められており、職業レディネス・テストの結果が示す対人志向の低さと「自分に親和的な人の集まった環境でない」と対人関係がうまくできない」という本人の状況とをあわせると、困難があることがわかる。

職業紹介に際しては、比較的得意とする「数理」「空間」の領域を生かした軽作業において職務探索をすることが求められよう。また、本人の問題としては、実際に職場で働いてみる経験を通して「できる仕事」を検討する作業が必要であろう。

## ② 自己理解の指導について

「数理」だけは平均以上であるが、この領域だけを拠り所にして仕事を探すとうまくいかないことを本人がどのように受けとめるかが問題となろう。こうした点について自己理解ができないと、能力を発揮できる仕事を求めて目標を高く持ち、常にチャレンジするという姿勢を続けることになり、いつになっても就職から遠いといった事態を招きかねない。

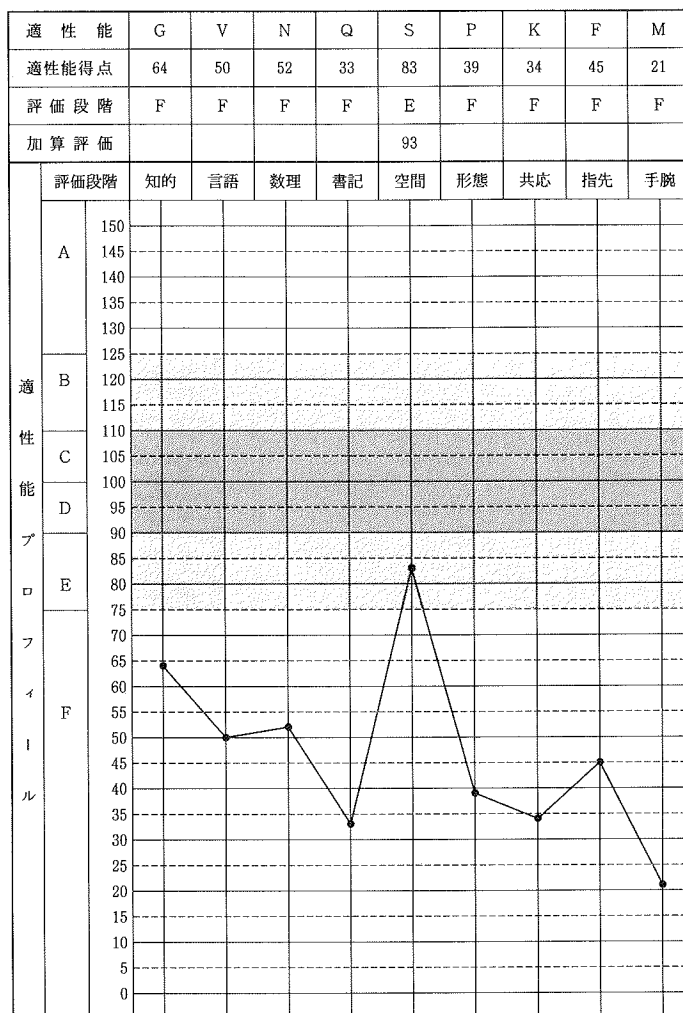
入職をめざそうとすれば適性能得点の低い領域を見ないわけにはいかない。本人の障害受容が難しい場合、就労は生計をたてる方便であり、職業生活に自己実現を求めないという、ある程度の「割り切り」が必要となる。自分自身の能力を発揮する場面は仕事以外で見いだすということをおこなうことができるかどうかは鍵となろう。

## 2. 事例2：16歳男子

### (1) 職業適性について

認知機能群（G，V，N，Q性能）、知覚機能群（S，P性能）、運動機能群（K，F，M性能）の中では、運動機能群が特に低い。知覚機能群の「空間」が他より突出して高いものの、全体として平均以下である。

「空間」以外のすべての領域の評価が低いために、職務に必要なとされている能力をすべてクリアしている職業名をあげることはできない。



(2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

パスカル&サッテル法による得点は48点。総合計時間は5分11秒。

ハットの解釈によれば、「組織に関する因子」からは、本人の中に“硬さ”があることを指摘できる。こうしたことから、思いこみが激しい、周りとの協調がとれないことが予想される。また、全体的に図形が小さいことから自信のなさがうかがえ、自己防衛的、抑制的であり、自分の中のこだわりを他者によって変えられると思うと課題に対応できなくなることが予想される。

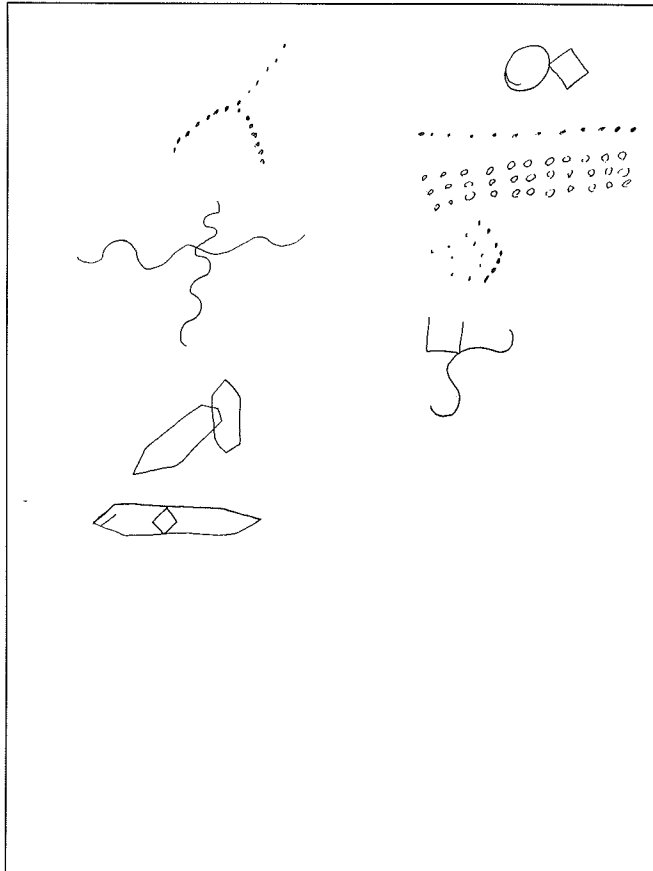
他の因子には、大きな問題はない。

(3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれも健常者の8割強から9割強であり、これらの情報を適切に利用することに困難はないものと思われる。したがって、対人関係の問題が指摘される場合は、得られた情報を適切に利用できない可能性が指摘できる。

また、ベンダー・ゲシュタルト・テストではパスカル&サッテル法による得点が48点と健常者の範囲であるのに対して、ハットの解釈では、思いこみが激しい、あるいは周りとの協調がとれない

などが指摘されていることから、日常生活においては「思いこみ」などによる読み違いが起こる可能性も否定できない。



提示された 音 声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸 福	8				8	
怒 り		6		2	8	
悲 しみ			6	2	8	
嫌 悪			3	5	8	正答率
合 計	8	6	9	9	32	78%

提示された 表 情	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸 福	8				8	
怒 り		7		1	8	
悲 しみ	1	2	4	1	8	
嫌 悪		3		5	8	正答率
合 計	9	12	4	7	32	75%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸 福	8				8	
怒 り		8			8	
悲 しみ			6	2	8	
嫌 悪		2		6	8	正答率
合 計	8	10	6	8	32	88%

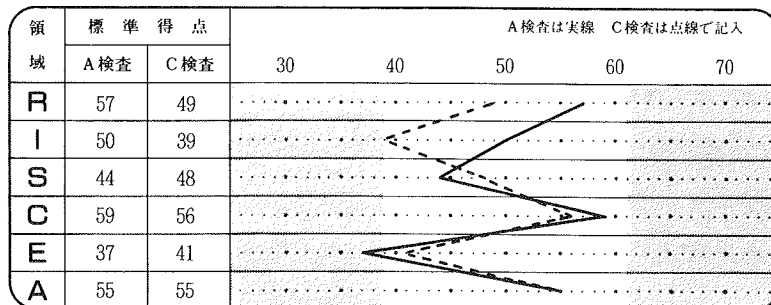
#### (4) 職業レディネス・テスト

##### 【A検査とC検査の結果から】

現実的領域・慣習的領域・芸術的領域の仕事に対する「興味」は比較的強く、企業的領域の仕事に対する「興味」は弱い。

また、現実的領域・研究的領域の仕事については、「興味」の大きさに対し「自信」はそれほどでもない。

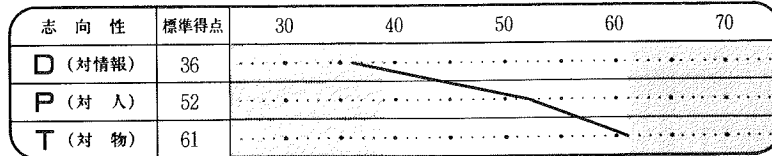
##### A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール



【B検査の結果から】

対物志向が強く、対情報志向は弱い。A検査とC検査の結果とB検査の結果とが一致していない領域の仕事は、今後の進路を考える対象にはなりにくい。慣習的領域・芸術的領域の仕事がそれにあたる。

B検査(基礎的志向性)のプロフィール



(5) 軽度注意障害が認められた。2回目は1回目よりも正答率は若干上がった(47.5%→55%)が、反応時間は逆に長く必要であった(1.15秒→1.30秒)。マウスを使った検査への取り組みは消極的であった。

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解(障害理解)を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査の適性能得点が低く、「手腕」の検査得点が特に低い。熟練した技能を要しない仕事であっても、事業所の配慮なくして就職することは難しいといえる。

また、自分の思いこみを修正することが苦手であり、簡単そうな課題は多少の困難があっても立ち直ることができるが、困難の大きな課題では一度失敗すると投げってしまうことが多い。したがって、簡単な課題を用意するなどの配慮が必要であるということからも、事業所の配慮なくして就職することは難しいと言わざるを得ない。

② 自己理解の指導について

入職をめざそうとすれば適性能得点の低い領域を見ないわけにはいかないことから、就労は生計をたてる方便であり、職業生活に自己実現を求めないという、ある程度の「割り切り」が必要となる。自分自身の能力を発揮する場面は仕事以外で見いだすということをお納得できるかどうか鍵となる。

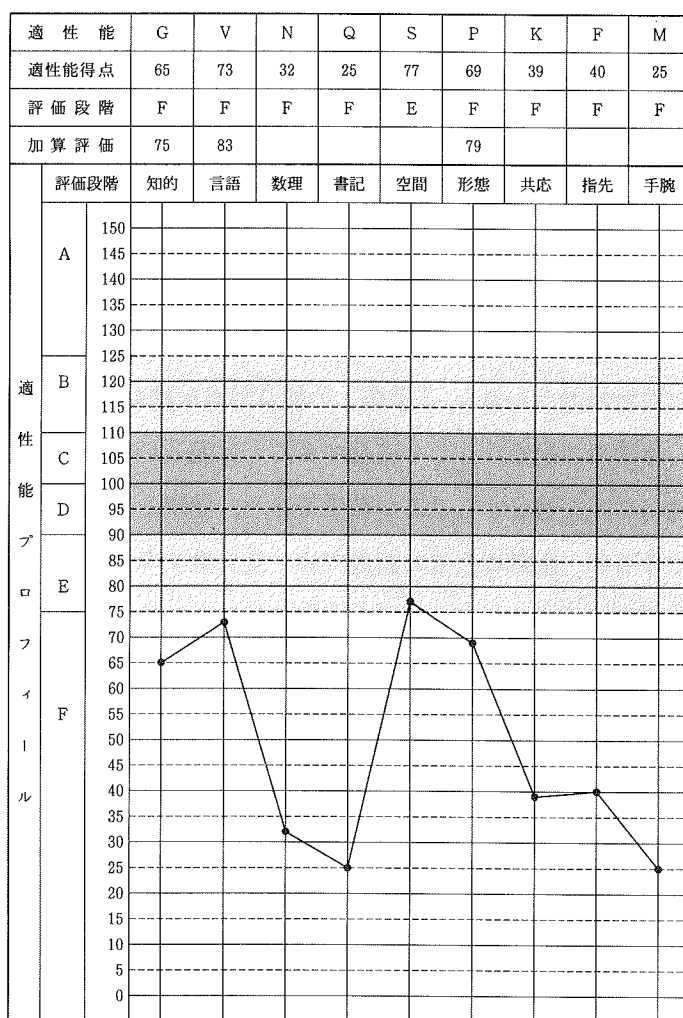
本人の障害受容がむずかしいと予測されるが、こうした自己理解ができないと、目標を高く持ち、常にチャレンジするという姿勢を続けることになり、いつになっても就職から遠いといった事態を招きやすい。しかし、注意検査では軽度注意障害に加えて学習効果が認められないことが指摘されており、背伸びした職業選択を試みるのであれば、適職を見いだすことは困難であり、モラトリアムを決め込むことで自己防衛することに追い込まれる可能性もある。

### 3. 事例3 : 16歳男子

#### (1) 職業適性について

認知機能群 (G, V, N, Q性能), 知覚機能群 (S, P性能), 運動機能群 (K, F, M性能) の中では, 運動機能群が特に低い。認知機能群では「言語」が, 知覚機能群では「空間」が高いが, 全体的には平均より低い。

「知的」「言語」「空間」「言語」が個人内では高いものの, 職務に必要とされている能力をすべてクリアしている職業名をあげることはできない。



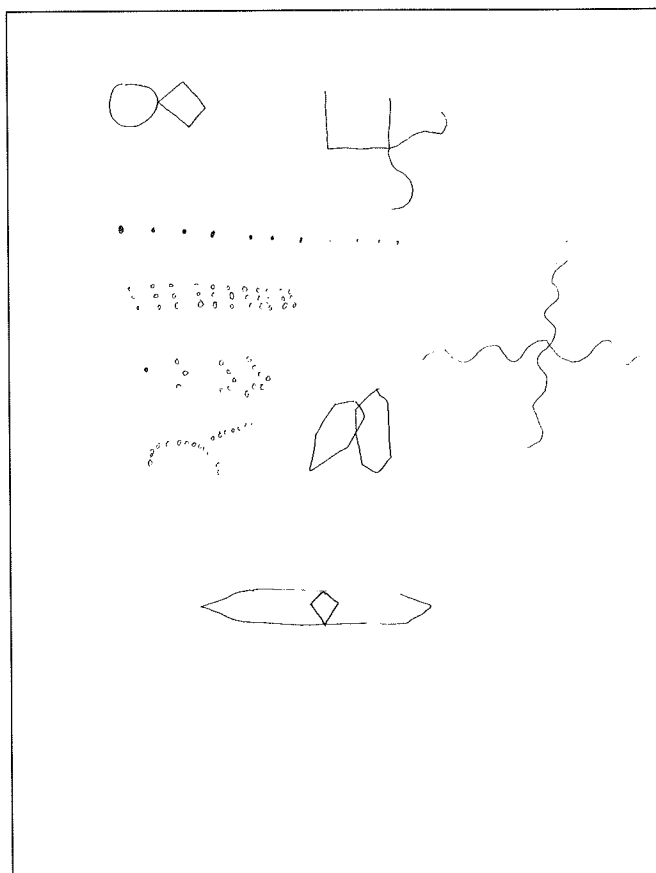
#### (2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

パスカル&サッテル法による得点は84点。総合計時間は6分45秒。

ハットの解釈によれば, 「組織に関する因子」「雑多な因子」から, 課題が変化すると新しい事態に適応するのが難しい, 課題の変化に対応できない, また, 複雑すぎると総合的な認識ができない, などの点を指摘できる。作業はいい加減である。加えて, 「ゲシュタルトの形の変化に関する因子」は, 注意散漫とか集中力のなさといった問題ではなく, 時間をかけたとしてもできない可能性があ

ることを示唆する。

その他の因子には、大きな問題はない。



提示された 音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫉悪		
幸福	6		1	1	8	
怒り		7		1	8	
悲しみ			5	3	8	
嫉悪	1	1	3	3	8	正答率
合計	7	8	9	8	32	66%

提示された 表情	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫉悪		
幸福	8				8	
怒り		6	2		8	
悲しみ		1	5	2	8	
嫉悪		3		5	8	正答率
合計	8	10	7	7	32	75%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫉悪		
幸福	8				8	
怒り		7		1	8	
悲しみ			8		8	
嫉悪		1		7	8	正答率
合計	8	8	8	8	32	94%

### (3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」では健常者の8割弱だが、「表情のみ」「音声+表情」では健常者の平均とほぼ等しく、視覚的な手がかりと聴覚的な手がかりを併せて利用することで、トラブルを避けることが可能であろう。

ベンダー・ゲシュタルト・テストでは、パスカル&サッテル法による得点が84点と健常者の上限ぎりぎりであり、若干の問題点を指摘できる（GATBでは空間・形態ともに平均を下回る）が、表情の識別には特別の困難は指摘できない。これに対し、ハットの解釈で課題の変化や新しい事態への対応が困難である可能性が指摘されていることから、対人的な問題があるとすれば、こうした「状況に応じた対応」が困難であることによっていると考えられる。

### (4) 職業レディネス・テスト

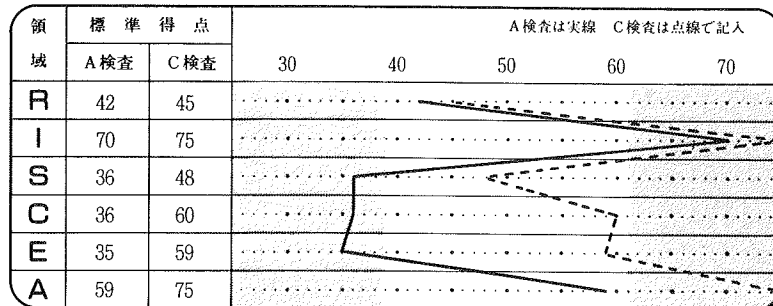
#### 【A検査とC検査の結果から】

研究的領域・芸術的領域の仕事に対する「興味」が強く、その仕事を遂行する「自信」はさらに強い。一方、現実的領域・社会的領域・慣習的領域・企業的領域に対しては「興味」を持ってない仕

事である。特に、社会的領域・慣習的領域・企業的領域については「自信」があるのに対し、「興味」の持てない仕事であることから、今後の進路を考える対象として意識されていない。

関心の比較的高い社会的領域・慣習的領域に共通する仕事としては、事務関係があげられる。

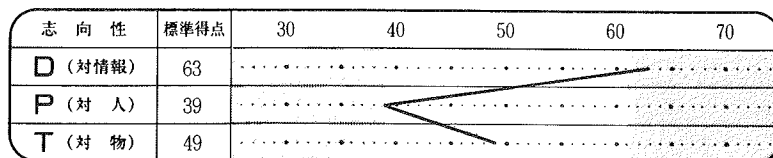
**A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール**



**【B検査の結果から】**

対情報志向が高く、対人志向・対物志向の仕事は苦手であると考えている。

**B検査(基礎的志向性)のプロフィール**



(5) 軽度注意障害は認められなかった。

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解(障害理解)を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査では、職務に必要な得点をすべてクリアしている職務はなかった。しかし、適性能力領域であと1領域の基準がクリアできれば、可能性のある職務を見いだすことができるというプロフィールである。こうした点を基準表にしたがって見ていくと、「書記」がE段階(75以上)であれば、「個人サービスの仕事」「警備、巡視の仕事」があげられる。また、「手腕」がE段階(75以上)であれば、「介護サービスの仕事」「理容・美容の仕事」「据付け機関、建設機械の運転の仕事」「建設設備工事の仕事」「手腕作業主体の仕事」などがあげられる。

しかし、「書記」「手腕」の検査得点はいずれも低く、このままでは可能性は展望できないことがわかる。通常、現業部門に適性を見いだすプロフィールであるが、手指の巧緻性に困難がある。時間をかけても細部に注意を払うことができるようにならないという困難があると考えられ、巧緻性の訓練を繰り返しても改善の見通しがたないことが予想される。粗大運動の軽作業であれば、配慮により就職可能性が見いだせるかもしれない。もしくは、社会性の面で問題がなければ「個人サービスの仕事」をめざして準備することが合理的である。しかし、職業レディネス・テ



ストの結果が示す対人指向の低さと「仲間内でも対人関係がうまくできない」という本人の状況とをあわせると、困難があることがわかる。

職業紹介に際しては、比較的得意とする「言語」「空間」の領域を生かした軽作業において職務探索することが求められよう。また、本人の問題としては、実際に職場で働いてみる経験を通して「できる仕事」を検討する作業が必要であろう。

## ② 自己理解の指導について

時間をかけて課題に取り組むことにより成功率を高めようとしても、作業には困難が伴う。また、課題が変化すると新しい事態に適應することが難しいので、複雑でないことを繰り返し行うような仕事に目を向けることが好ましい。こうした点に自己理解ができないと、能力に比して自信が高く、例えば「研究職」を求めて目標を高く持ち、常にチャレンジするという姿勢を続けることになり、いつになっても就職から遠いといった事態を招きかねない。

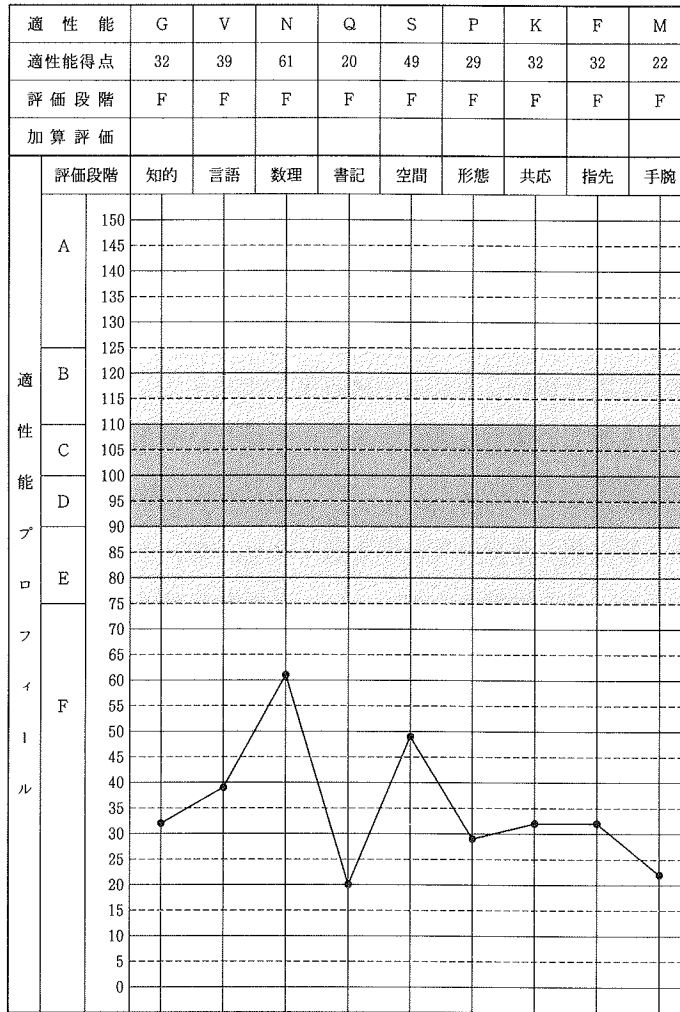
しかし、難しい課題に取り組むには特別な配慮が必要であるということからも、事業所の配慮なくして就職することは難しいと思われる。入職をめざそうとすれば適性能得点の低い領域を見ないわけにはいかない。本人の障害受容が難しいとは思われるが、就労は生計をたてる方便であり、職業生活に自己実現を求めないという、ある程度の「割り切り」が必要となる。自分自身の能力を発揮する場面は仕事以外で見いだすということをお納得できるかどうか鍵となる。

## 4. 事例4：16歳男子

### (1) 職業適性について

認知機能群（G，V，N，Q性能）、知覚機能群（S，P性能）、運動機能群（K，F，M性能）のすべてにおいて低い。

個人内では、認知機能群の「数理」と知覚機能群の「空間」が高いものの、職務に必要とされている能力をすべてクリアしている職業名をあげることはできない。



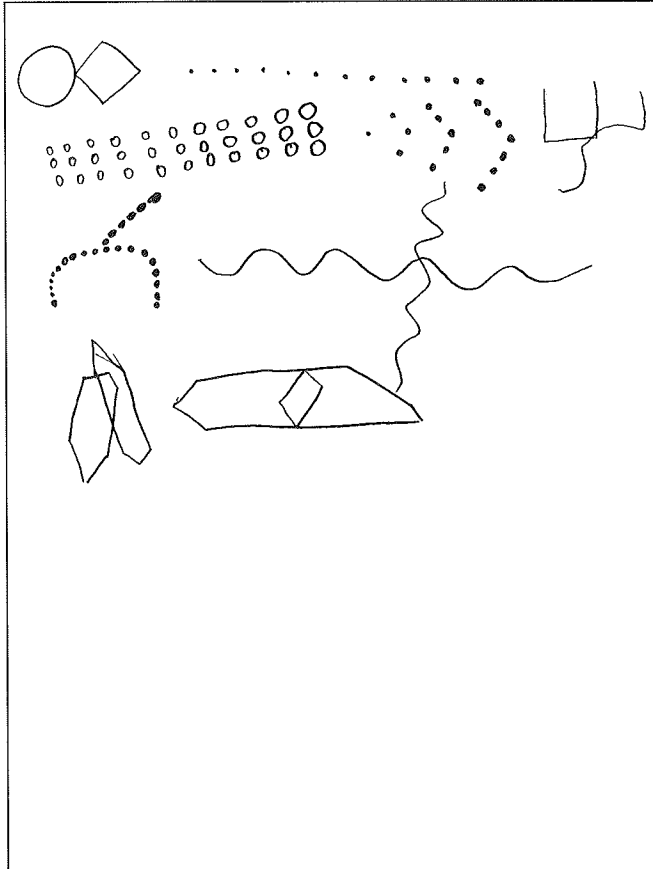
(2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

パスカル&サッテル法による得点は51点。総合計時間は10分23秒。

ハットの解釈によれば、「組織に関する因子」では、自分を押さえる、葛藤をさける、嫌なことを嫌とは言えずに逃げるといった傾向が読み取れる。また、「ゲシュタルトの歪みに関する因子」では、できあがったものが正確になるように回転させようとする傾向が観察されており、困ると自己中心的になる傾向もある。

作業では、時間をかければできるが、1時間の中で他と同じペースでやるように言われるとできない。これを、時間制限でやるように指示した場合には放棄することも予想され、スピードをあげようとするのは困難である。

「寸法に関する因子」「運動に関する因子」「被験者の作業方法に関する因子」には、大きな問題はない。



提示された 音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	7		1		8	
怒り		6	1	1	8	
悲しみ			6	2	8	
嫌悪	1	1	2	4	8	正答率
合計	8	7	10	7	32	72%

提示された 表情	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		5	2	1	8	
悲しみ		2	4	2	8	
嫌悪		2		6	8	正答率
合計	8	9	6	9	32	72%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		6		2	8	
悲しみ			8		8	
嫌悪		1	1	6	8	正答率
合計	8	7	9	8	32	88%

### (3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」「表情のみ」のいずれも健常者の8割強と若干の困難が認められる。しかしながら「音声+表情」では両方の手がかりを併せて利用することで、9割弱の正答率となっている。このため、会話は視覚、聴覚、双方の情報を利用できるように向かい合った形で行うことが望ましいといえる。

ベンダー・ゲシュタルト・テストではパスカル&サッテル法による得点が51点と健常者においては得点が高い(評価としては低い)方であるが、健常の範囲内である。これに対し、ハットの解釈では、困ると自己中心的になる傾向や葛藤を避ける傾向などが指摘されており、対人的な問題は、こうした「状況に対する対応」の問題である可能性がある。

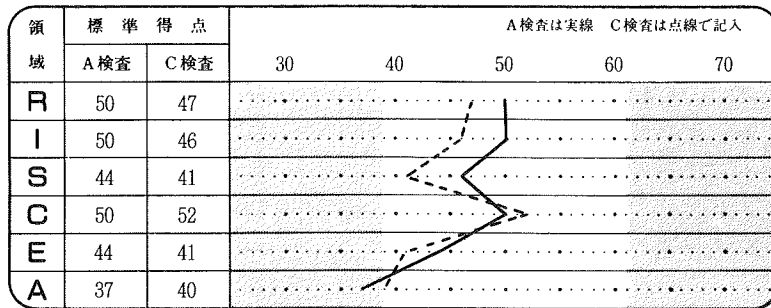
### (4) 職業レディネス・テスト

#### 【A検査とC検査の結果から】

特別に関心の高い領域がないことが特徴である。現実的領域・研究的領域・社会的領域・企業的領域の仕事に対する「興味」に対し、その仕事を遂行する「自信」はそれほどでもない。

また、慣習的領域の仕事については、「自信」に対して「興味」がそれほどでもないことから、今後の進路を考える対象として意識されていないことがわかる。

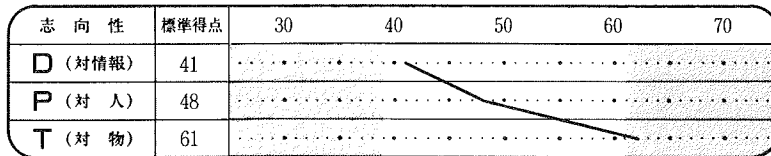
**A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール**



**【B検査の結果から】**

対物志向が高く、対人志向、対情報志向の仕事はどちらかといえば苦手であると考えている。

**B検査(基礎的志向性)のプロフィール**



(5) 軽度注意障害が認められた。学習効果が認められず、反応時間は短くなった (1.00秒→0.93秒)が、2回目は1回目よりも正答率が下がった (63.8%→52.5%)。

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解 (障害理解) を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査の適性能得点が全体的に低い。熟練した技能を要しない仕事であっても、事業所の配慮なくして就職することは難しいといえる。また、むずかしい課題では、「できない」と表明することなく、投げ出してしまう傾向がある。自分のペースでやってよい仕事で、自信の持てる課題であれば、仕事を遂行することはできるが、簡単な課題でも時間を限られると、取り組むことができなくなってしまう傾向もある。

しかし、嫌なことでも、困難な課題でなければ指示にしたがって行動できるという点では、評価されるのではないかと考えられる。このため、自信の持てることを一人で行うような仕事に目を向けていくことが好ましい。

② 自己理解の指導について

配慮を求めて仕事を遂行するという理解ができないと、時間に対する不安から、チャレンジするという姿勢をもち続けることができなくなり、いつになっても就職から遠いといった事態を招きやすい。しかし、学習効果が認められないことから、背伸びした職業選択を試みるのであれば、適職を見いだすことは困難であり、モラトリアムを決め込むことで自己防衛することに追い込ま

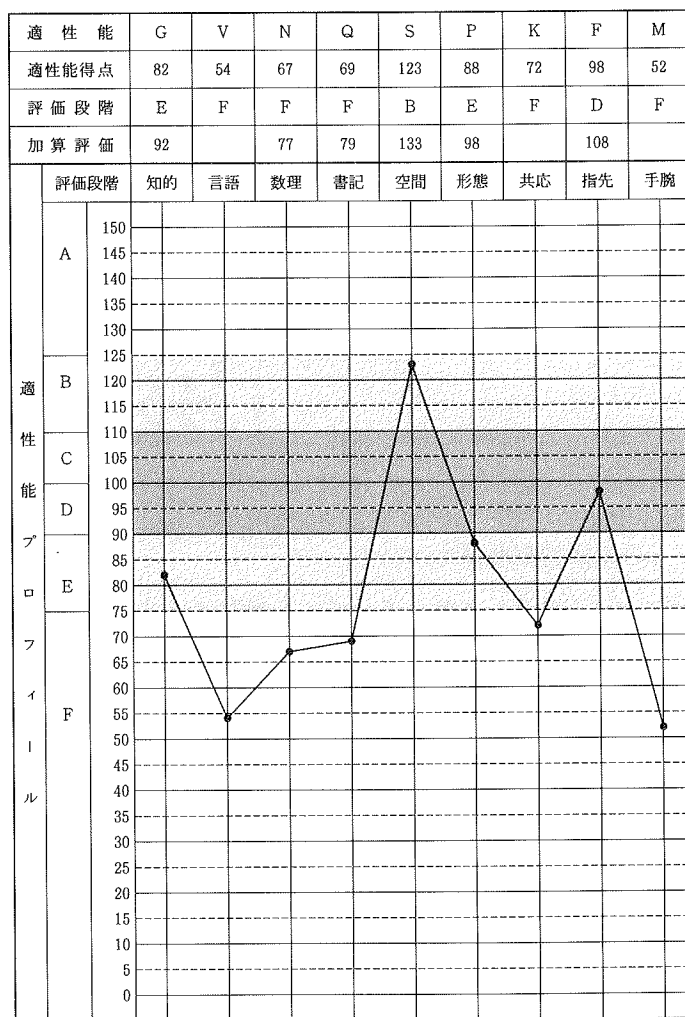
れる可能性もある。

## 5. 事例5：16歳女子

### (1) 職業適性について

認知機能群（G, V, N, Q性能）、知覚機能群（S, P性能）、運動機能群（K, F, M性能）の中では、認知機能群が低い。個人内では、知覚機能群の「空間」と運動機能群の「指先」の適性能得点が高いが、認知機能群の「言語」と運動機能群の「手腕」は低い。

適性能と基準表との照合により、「デザイン・写真の仕事」「簡易事務の仕事」「販売の仕事」「手工技能の仕事」「個人サービスの仕事」「警備・巡視の仕事」の6つの仕事に適性が確認された。



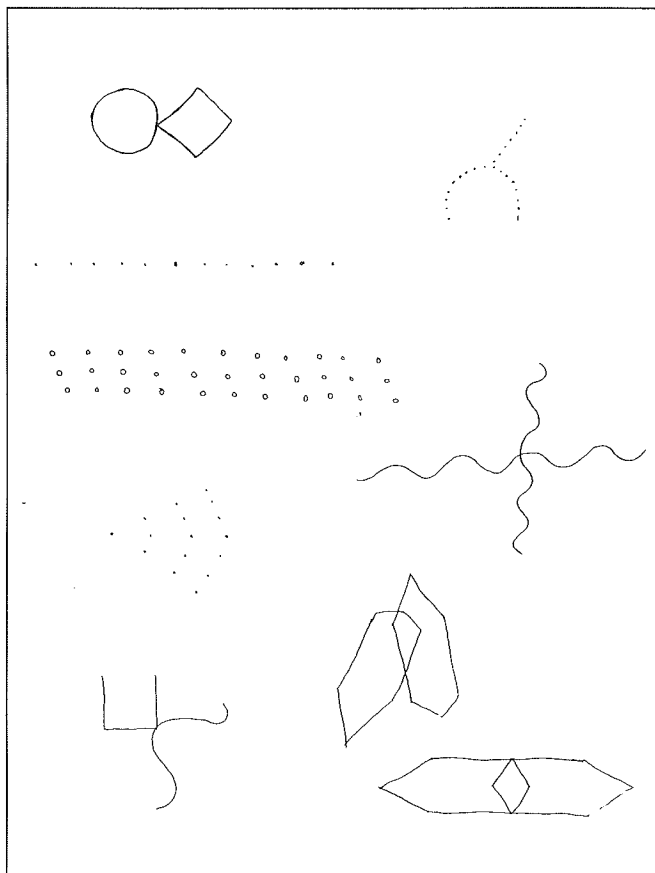
### (2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

パスカル&サッテル法による得点は9点。総合計時間は、7分0秒。

観察によれば、難しいところでもないのに並々ならぬ気をとられて描くなど、時間をかけているにもかかわらず、また、自分の作業の結果が適切であっても自信が持てずに不安が高い傾向が読み

取れる。衝動性のコントロールに問題はなく、爆発するというよりも小心翼翼としている。

すべての因子に関し、大きな問題はない。



提示された 音声	生徒の回答				合計	正答率
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	6			2	8	
怒り		5	2	1	8	
悲しみ			7	1	8	
嫌悪	3	1	1	3	8	
合計	9	6	10	7	32	68%

提示された 表情	生徒の回答				合計	正答率
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		4	3	1	8	
悲しみ		2	2	4	8	
嫌悪		3	1	4	8	
合計	8	9	6	9	32	56%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	正答率
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		7		1	8	
悲しみ	1		6	1	8	
嫌悪		3	2	3	8	
合計	9	10	8	5	32	72%

### (3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれも健常者の8割を越えず、全体的に低い傾向にある。また、「音声のみ」においては快（幸福）－不快（嫌悪）の混同が認められるなど、非言語的な情報を適切に利用できていない可能性が指摘できる。したがってこの点が対人関係におけるトラブルの原因の1つとなっている可能性もある。

ベンダー・ゲシュタルト・テストではパスカル&サッテル法による得点が9点と健常者と比較しても低く（評価としては高い）、訓練による向上が期待できる。これに対し、ハットの解釈では、不安傾向の高さが指摘されており、情報を正しく利用できるようになったとしても、対人面での不安が残る。

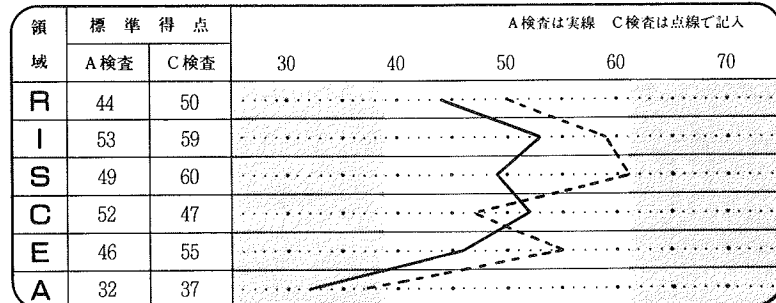
### (4) 職業レディネス・テスト

#### 【A検査とC検査の結果から】

慣習的領域以外の仕事では、その仕事を遂行する「自信」が大きいのに対し、「興味」はそれほどでもないことから、今後の進路を考える対象として意識されていない。

「興味」の比較的高い領域に共通する仕事としては、事務関係の仕事があるが、どんなことをするのかをよく知らない仕事が多いので、自分のまわりの仕事を調べたりして知識を広げると、興味のある仕事も変わる可能性がある。

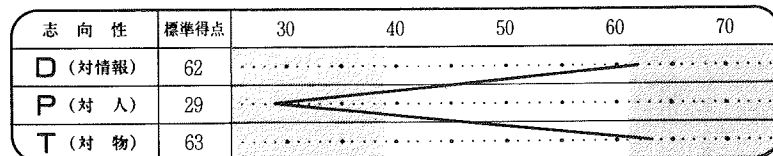
**A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール**



**【B検査の結果から】**

対情報志向と対物志向が高い。対人志向の仕事は苦手である。

**B検査(基礎的志向性)のプロフィール**



(5) 軽度注意障害は認められなかった。

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解（障害理解）を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査の適性能得点にばらつきがあり、言語と手腕の検査得点が特に低い。また、コミュニケーションでは、相手の感情の理解と自分の感情の表出の両方に困難があり、就職に際しては事業所の配慮を欠くことができないと思われる。

職業適性検査で適性が見いだされた6つの仕事をみると、多かれ少なかれ、対人関係のスキルを必要とすることから、こうした仕事を選択の対象とするには困難が大きいといえる。けれども、入職までの間に「人に与える自分の印象を変える」という目標を達成できれば、「簡易事務の仕事」「手工技能の仕事」に職域が広がる可能性がある。

② 自己理解の指導について

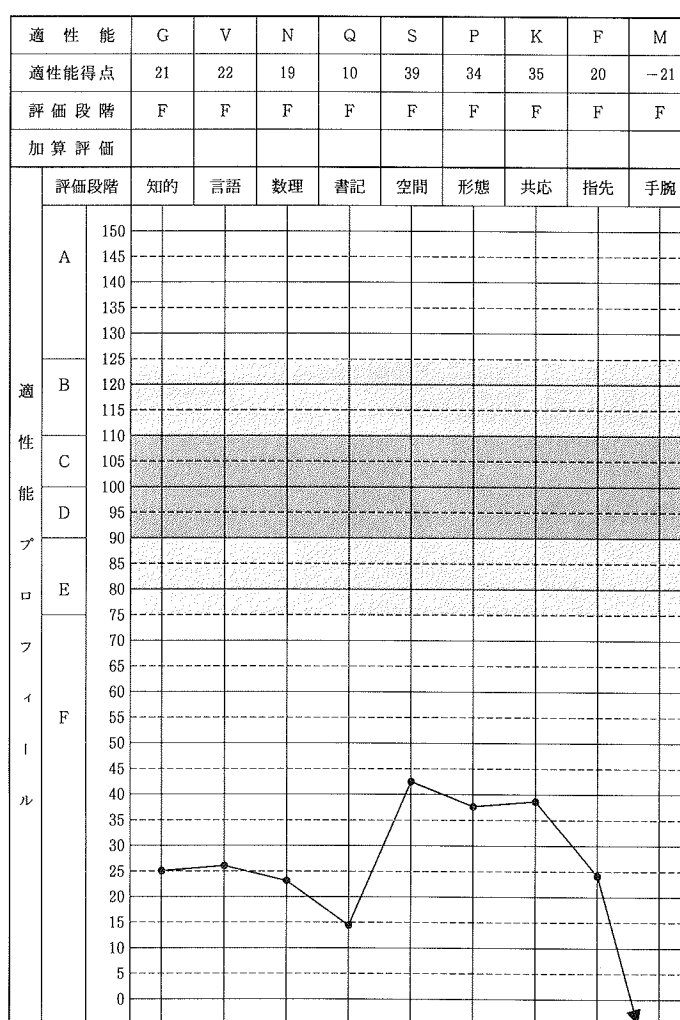
対人関係がうまくできないということは本人が必要以上に自覚しており、それが対人関係以外のことにも自信を失わせ、不安を高める、という方に影響している傾向がある。こうしたことから、働いて生活をたてることなどは自分自身の問題として思いもよらないという状況である。自

分の能力に自信を持つこと、心から笑う場面を多く経験すること、などは、いずれ職域の拡大につながると考えられるが、長期的展望に立った指導が必要であることはいうまでもない。

## 6. 事例6：16歳男子

### (1) 職業適性について

認知機能群（G，V，N，Q性能），知覚機能群（S，P性能），運動機能群（K，F，M性能）は全体的に低い。したがって、職務に必要とされている能力をすべてクリアしている職業名をあげることはできない。



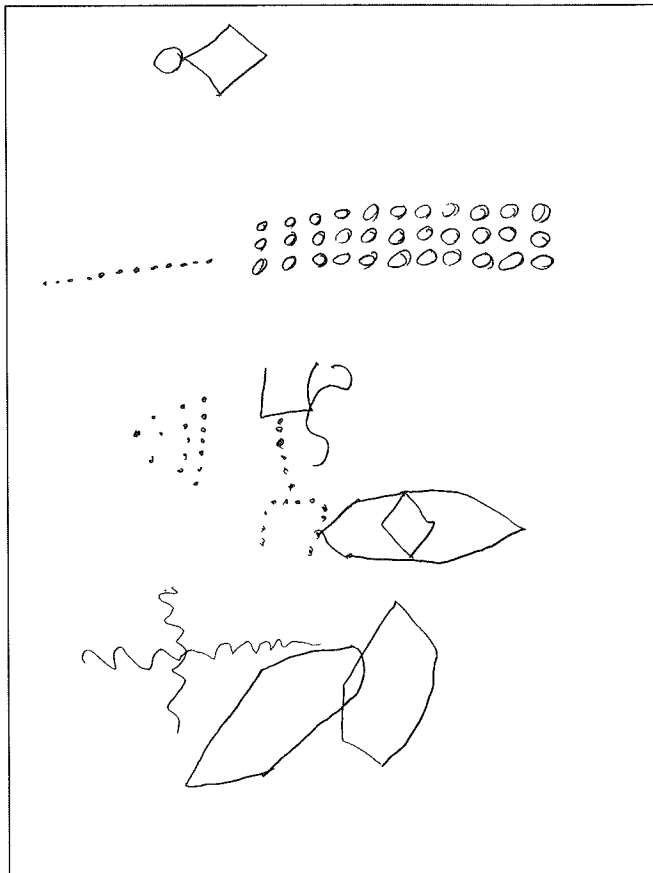
### (2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

パスカル&サッテル法による得点は91点。総合計時間は5分47秒。

それぞれの因子に少しずつ問題がある。ハットの解釈によれば、例えば、課題が変化すると新しい事態に適応するのが難しい。また、1回の失敗があると、立ち直ることが難しいために、消極的拒否をする傾向があるなどが指摘できる。



課題への取り組みの問題としては、関心がない態度をとる点が特徴的である。



提示された 音 声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸 福	6			2	8	
怒 り		6		2	8	
悲 しみ	1		6	1	8	
嫌 悪	1	1	1	5	8	正答率
合 計	8	7	7	10	32	72%

提示された 表 情	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸 福	8				8	
怒 り		7	1		8	
悲 しみ		2	3	3	8	
嫌 悪		3	2	3	8	正答率
合 計	8	12	6	6	32	66%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸 福	7			1	8	
怒 り		6		2	8	
悲 しみ			6	2	8	
嫌 悪		6		2	8	正答率
合 計	7	12	6	7	32	66%

### (3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」では健常者の8割強であるが、快（幸福）－不快（嫌悪）の混同が認められ、「表情のみ」では8割弱、「音声＋表情」では7割弱と全体的に低い傾向にある。したがって、非言語的な情報を適切に利用できていない可能性が指摘でき、この点が対人関係におけるトラブルの原因の1つとなっている可能性がある。

また、ベンダー・ゲシュタルト・テストではパスカル&サッテル法による得点が91点と健常者の範囲を越えていることから、視覚的な情報の処理そのものに困難がある可能性がある。加えて、ハットによる解釈では、新しい課題への対応の困難等の複数の問題点が指摘されており、情報の処理だけでなく、「状況に対する対応」にも困難がある可能性がある。

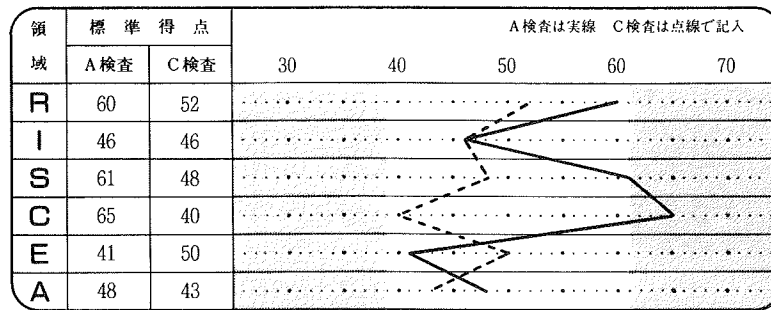
### (4) 職業レディネス・テスト

#### 【A検査とC検査の結果から】

慣習的領域・社会的領域・現実的領域の仕事に対する「興味」が大きいのに対し、その仕事を遂行する「自信」はそれほどでもないといえる。また、企業的領域の仕事については、「自信」が大きいのに対し「興味」はそれほどでもないことから、今後の進路を考える対象として意識されてい

ないことがわかる。

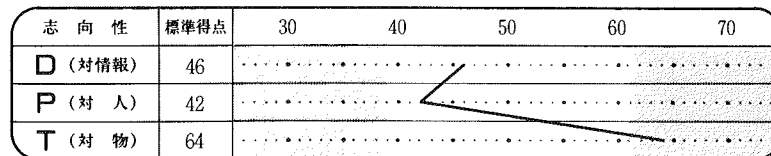
**A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール**



**【B検査の結果から】**

対物志向が強く、対人志向や対情報志向の仕事は苦手だと考えている。A検査とC検査の結果とB検査の結果とが一致していない領域の仕事は、今後の進路を考える対象にはなりにくいといえる。現実的領域・社会的領域・慣習的領域の仕事がそれにあたる。

**B検査(基礎的志向性)のプロフィール**



(5) 軽度注意障害が認められた。また、学習効果は認められず、2回目は1回目よりも正答率はやや上がる(60.0%→62.5%)ものの、平均反応時間は長くなった(0.79秒→1.04秒)。

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解(障害理解)を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査の適性能得点が低く、指先と手腕の検査得点が特に低い。熟練した技能を要しない仕事であっても、事業所の配慮なくして就職することは難しい。

課題を放棄したことを見せずに切り抜ける方略を身につけてきた可能性が示唆されるが、これを作業場面でみると、「やめる」のではなく「いい加減にやる」ので、複雑でないことを繰り返すような仕事に目を向けることが好ましい。しかし、単純作業の場であってもミスが出たり、不良品の山を作るという問題を生じやすいことには変わりはない。手順を変えた場合には、変えたことを明確に示して理解させるような配慮のもとに行動をパターン化させることが必要である。

このことは、失敗体験を積んでいても学校を放棄するわけにいかなかったために、内的に静かに放棄するという、適応のためのメカニズムを身につけたためと思われる。作業を放棄するのではないが、課題に全力で取り組まないことで、自分の中で折り合いをつける方法で切り抜けてきた可能性が示唆される。

これは注意散漫とか、集中力のなさとかといった問題ではない。しかし、本人はやっているという形を作っているために、周りからみた評価とのギャップが大きいという問題が生じる。こうしたことが、対人関係で起こると、協調に困難があるという事態が生じる可能性も大きい。

また、自分にとってむずかしい課題に対し、「できない」ことを表明せずに、できなくても「やっている」ことを示して自分に対する批判をかわす傾向がある。就労の場では、できることを「正確に」やることを求められるため、この点について改善するための指導、もしくは本人が自分の作業特性として理解するための指導が必要である。

## ② 自己理解の指導について

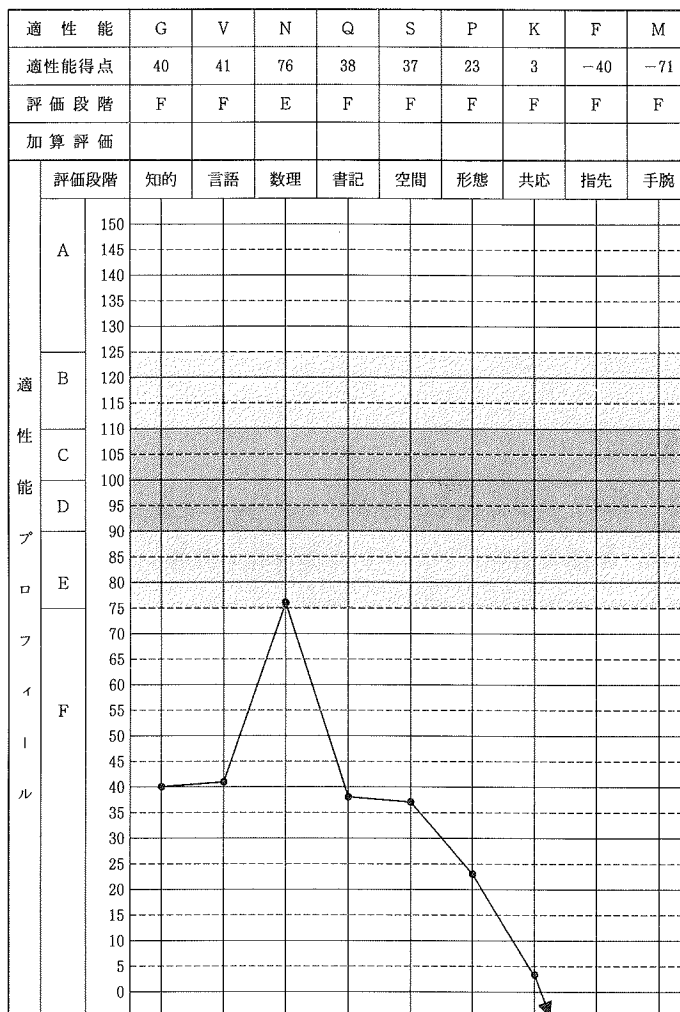
本人の障害受容が当面する最も大きな課題であろう。「できない」現実に対し、「頑張らせる」ことも重要であるが、配慮を求めていくという選択肢を今後の進路設計に加えるのは、保護者をはじめとして周囲のおとなの役割であろう。職業リハビリテーションの支援を利用することも、その選択肢の一つとして考えられる。しかし、現在の年齢からみて、まずは教育もしくは福祉関係の相談がもっともらしい。

不登校ができないタイプであり、実際に学校に行くことを拒否できなかった特性は、今後の成功経験によっても改善が難しいが、自信を取り戻す可能性がないとはいえない年齢である。長期的な視野に立った計画のもとに、進路相談に関連させて障害を受容できるような指導を行っていくことが必要である。

## 7. 事例7：18歳男子

### (1) 職業適性について

個人内では、認知機能群（G，V，N，Q性能）の「数理」が比較的高いものの、認知機能群、知覚機能群（S，P性能）、運動機能群（K，F，M性能）の得点は全体的に低い。したがって、不得意な領域の評価が低いために、職務に必要とされている能力をすべてクリアしている職業名をあげることはできない。



(2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

パスカル&サッテル法による得点は151点。総合計時間は6分37秒。

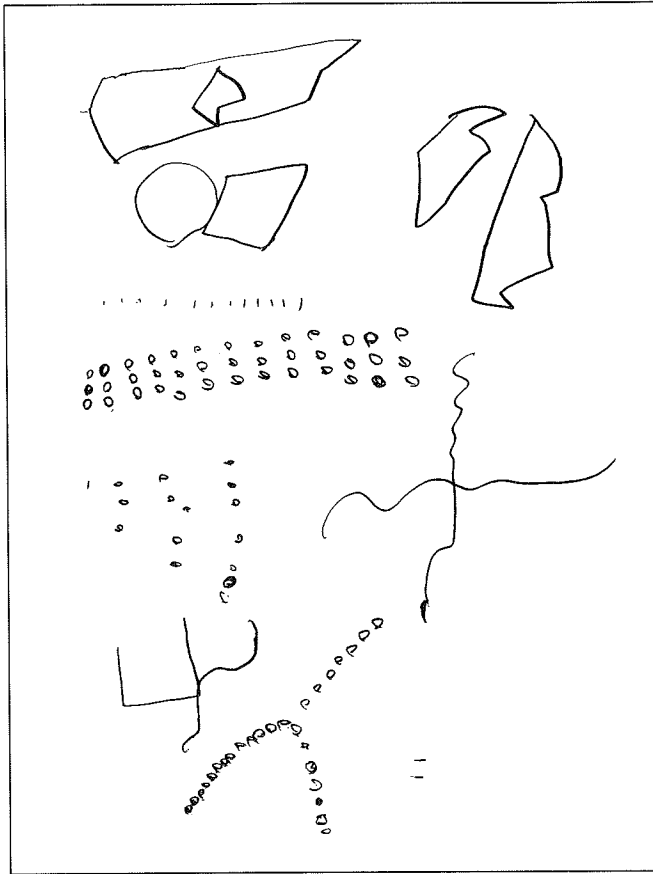
顕著な認知の障害がある。特に、課題が変化すると新しい事態に適応するのが難しい。しかし、行動観察によれば、本人は何とかなっていると思っているために、周りからみた評価とのギャップが大きいという問題が生じる。こうしたことは、対人関係では、「注意されているかどうか、がわからない」というような問題を引き起こしやすい。

(3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」では健常者の8割強とやや低い傾向を示すとどまるが、「表情のみ」では健常者の半分をやや越える程度であり、困難が指摘できる。また、「音声」の情報よりも「表情」の情報を利用する傾向が強いためか、「音声+表情」では、「音声のみ」の場合よりも正答率が低い。さらにいずれの条件においても快（幸福）と不快（怒り、嫌悪）の混同が認められるなど対人関係面での困難が予想される。

また、ベンダー・ゲシュタルト・テストではパスカル&サッテル法による得点が151点と健常者

の範囲を大きく越えていることから、視覚的な情報の処理そのものにも困難がある。加えて、ハットによる解釈では、複数の問題点が指摘されており、情報の処理だけでなく、「状況に対する対応」にも困難がある可能性がある。



提示された 音声	生徒の回答				合計	正答率
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り	2	6			8	
悲しみ			8		8	
嫌悪	1		6	1	8	
合計	11	6	14	1	32	72%

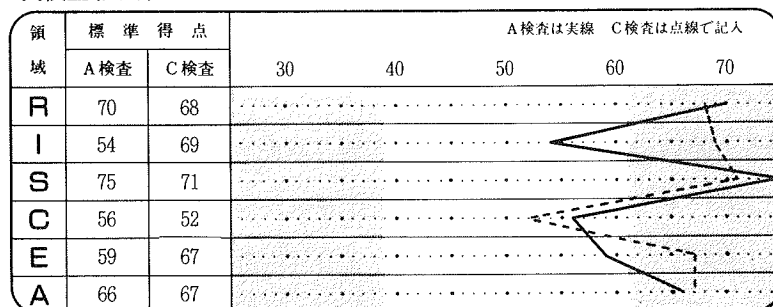
提示された 表情	生徒の回答				合計	正答率
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		7	1		8	
悲しみ	1	4	2	1	8	
嫌悪		8			8	
合計	9	19	3	1	32	47%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	正答率
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	5	1	1	1	8	
怒り		7	1		8	
悲しみ			7	1	8	
嫌悪	1	4	3		8	
合計	6	12	12	2	32	59%

#### (4) 職業レディネス・テスト

【A検査とC検査の結果から】

A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール



現実的領域・社会的領域・芸術的領域の仕事については、仕事に対する「興味」もその仕事を遂行する「自信」も大きい。また、研究的領域・企業の領域の仕事については、「自信」が大きいのに対し「興味」はそれほどでもないことから、今後の進路を考える対象として意識されていない。

【B検査の結果から】

対情報志向が強く、対人志向や対物志向の仕事は苦手であると考えている。A検査とC検査の結果とB検査の結果とが一致していない領域の仕事は、今後の進路を考える対象にはなりにくい。現実的領域・社会的領域・芸術的領域の仕事がそれにあたる。

B検査(基礎的志向性)のプロフィール

志向性	標準得点	30	40	50	60	70
D(対情報)	75	.....				
P(対人)	35	.....				
T(対物)	41	.....				

(5) 軽度注意障害が認められた。

課題の意味が理解できなかったために、ここでは注意の集中・持続に焦点をあて、方向性注意障害検査(単純反応条件と弁別反応条件)を実施した。

単純反応条件の検査は、パソコンの画面の中心を注視し、画面上にランダムに点滅される刺激にマウスを使って反応する時間を測定する検査である。平均反応時間は、1.20秒(ただし、標準値:健常成人13名/0.28秒,軽度知的障害者4名/0.38秒,中度知的障害者27名/0.55秒,重度知的障害者10名/1.07秒)であった。見落としはなく、すべての方向に注意は振り分けられていたが、反応時間のバラツキは大きかった。

弁別条件の検査は、パソコンの画面の中心を注視し、画面上にランダムに点滅される4色(黄,赤,青,緑)の刺激に対し、黄にはマウスの右ボタンを使って、その他の3色にはマウスの左ボタンを使って反応する時間を測定する検査である。平均反応時間は、1.52秒(ただし、標準値:健常成人13名/0.55秒,軽度知的障害者4名/0.71秒,中度知的障害者27名/1.08秒,重度知的障害者10名/1.73秒)であった。誤反応数は7個で黄色に多かった。反応時間のバラツキは大きかった。

以上の検査により、方向性注意の障害は、中・重度の知的障害者の反応傾向に近いといえる。

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解(障害理解)を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査の適性能得点が低く、指先と手腕の検査得点が特に低い。熟練した技能を要しない仕事であっても、事業所の配慮なくして就職することは難しい。また、課題の変化に即応できないことから、複雑でないことを繰り返し行うような仕事に目を向けることが好ましい。したがって、手順を変えた場合には、変えたことを明確に示して理解させる配慮のもと、行動をパターン化させることが必要である。

また、自分の思いこみを修正することが苦手である一方で、能力に比して自信が高い。しかし、難しい課題は、不安が先立って、指示を理解できない事態も予測される。簡単なことをかみくだいて指示されれば、課題に取り組むことができないわけではないが、必ず誰かがついて、見てい

かないと課題に挑戦できない。しかし、場合によっては、周りからの指示が自分自身に敵対するもののように感じて、恐怖や不安や理不尽な感じを持つ可能性も示唆される。

難しい課題に取り組むには特別な配慮が必要であることから、事業所の配慮なくして就職することは難しいと考える。

## ② 自己理解の指導について

本人の障害受容が当面する最も大きな課題であろう。「できない」ことに対し、「頑張る」ことも重要であるが、配慮を求めていくという選択肢を今後の進路設計に加えるのは、保護者をはじめとして周囲のおとなの役割であろう。職業リハビリテーションの支援を利用することも、その選択肢の一つとして考えられる。現在の年齢からみて、職業リハビリテーション関係の相談がもっともらしい。

長期的な視野に立った計画のもとに、職業指導に関連させて障害を受容できるような指導を行っていくことが必要である。

## 8. 事例8：18歳男子

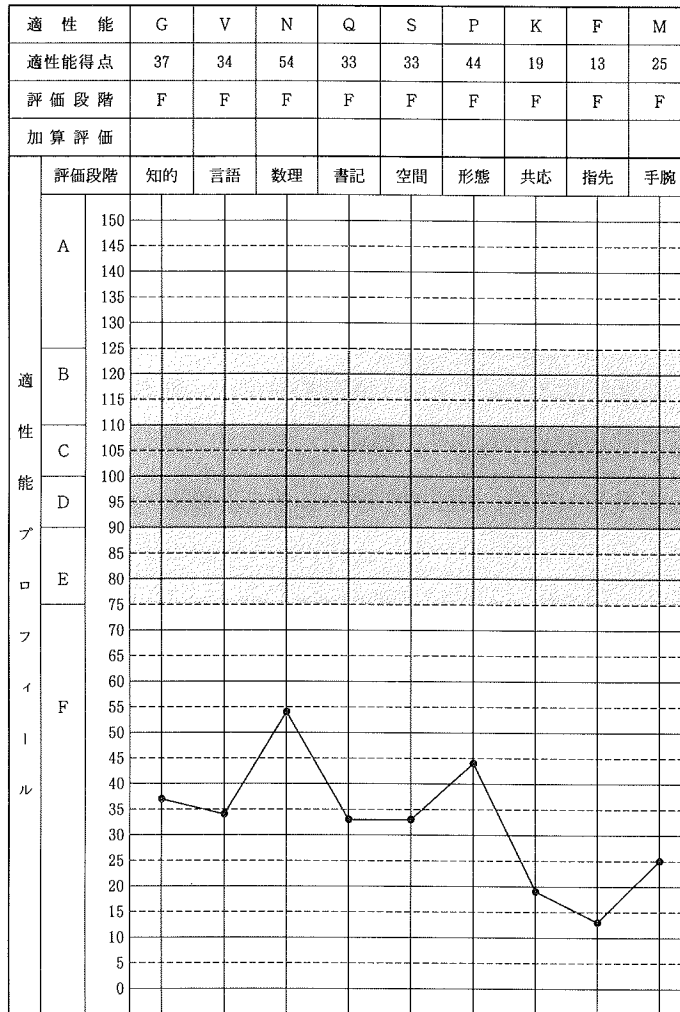
### (1) 職業適性について

認知機能群（G, V, N, Q性能）、知覚機能群（S, P性能）、運動機能群（K, F, M性能）のいずれも低いものの、特に運動機能群が低い。個人内では、認知機能群の「数理」が比較的高いものの、職務に必要とされている能力をすべてクリアしている職業名をあげることはできない。

### (2) ベンダー・ゲシュタルト・テストの結果から

パスカル&サッテル法による得点は31点。総合計時間は8分7秒。

顕著な認知の障害はない。ハットの解釈によれば、それなりにまとまってはいるが、細かいところでは大ざっぱで、要素が多くなったときに全体のバランスがとれない。全体の中での個々の役割を理解するのが苦手である。

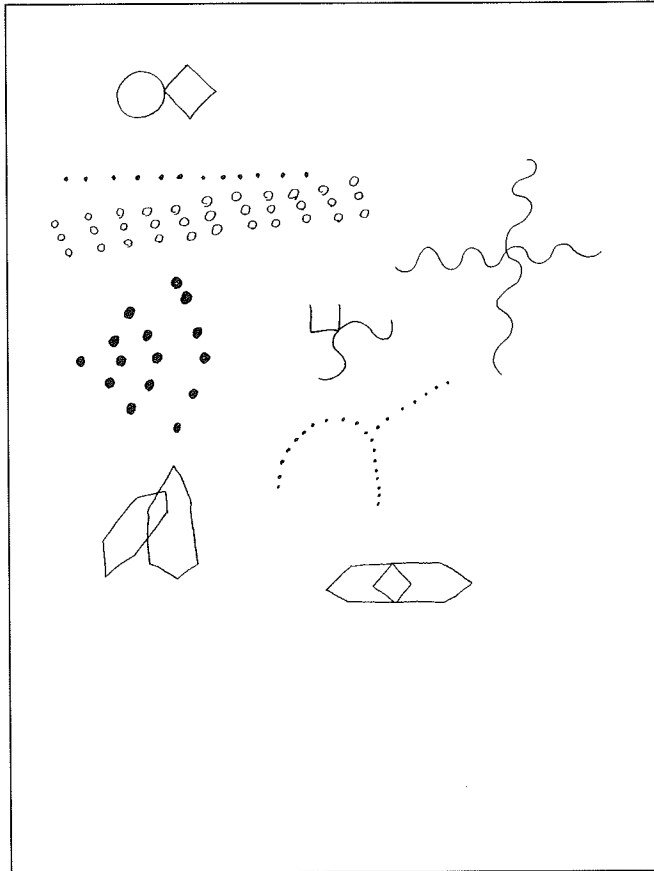


(3) 音声並びに表情からの感情識別検査について

「音声のみ」「表情のみ」「音声+表情」のいずれも健常者の8割強と若干の困難が認められる。また、「音声+表情」以外では、快（幸福）と不快（嫌悪）の混同が認められる。こうしたことは、対人関係における困難を予想させる。しかしながら、「音声+表情」では快-不快の混同は認められないことから、視覚・聴覚双方の情報を併せて利用することで、日常生活場面ではトラブルを避けることができる可能性がある。

ベンダー・ゲシュタルト・テストではパスカル&サッテル法による得点が51点と健常者においては得点が高い（評価としては低い）方であるが、範囲内である。これに対し、ハットの解釈では、困ると自己中心的になる傾向や葛藤を避ける傾向などが指摘されており、対人的な問題は、こうした「状況に対する対応」の問題である可能性がある。





提示された 音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	6			2	8	
怒り	1	6		1	8	
悲しみ			6	2	8	
嫌悪		1	1	6	8	正答率
合計	7	7	7	11	32	77%

提示された 表情	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		4	2	2	8	
悲しみ	1		7		8	
嫌悪		3	1	4	8	正答率
合計	9	7	10	6	32	72%

提示された 表情+音声	生徒の回答				合計	
	幸福	怒り	悲しみ	嫌悪		
幸福	8				8	
怒り		8			8	
悲しみ			5	3	8	
嫌悪		3		5	8	正答率
合計	8	11	5	8	32	81%

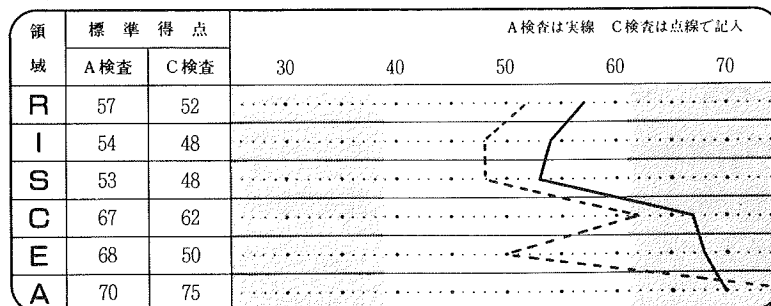
(4) 職業レディネス・テスト

【A検査とC検査の結果から】

芸術的領域・企業の領域・慣習的領域び仕事に対する「興味」が強く、特に「興味」の弱い領域がない。現実的領域・研究的領域・社会的領域・慣習的領域・企業的領域の仕事については、「興味」に対し、その仕事を遂行する「自信」はそれほど大きくない。

また、「自信」と「興味」の強い領域は芸術的領域である。

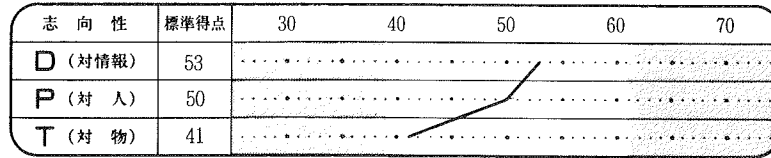
A検査(興味)とC検査(自信)のプロフィール



【B検査の結果から】

対情報志向が比較的高く、対物志向はそれほど高くない。物を扱う仕事はどちらかといえば苦手だと考えている。

B検査(基礎的志向性)のプロフィール



(5) 軽度注意障害が認められた。また、学習効果が認められず、2回目は1回目より正答率が下がり(67.5%→57.5%)、平均反応時間が長くなった(1.08秒→1.84秒)。

(6) 進路相談の課題 —— 自己理解(障害理解)を深めるために ——

① 職業準備について

職業適性検査の適性能得点が低く、指先と手腕、共応の検査得点が特に低い。熟練した技能を要しない仕事であっても、事業所の配慮なくして就職することは難しい。

また、むずかしい課題では、「できない」と表明することが苦手であるために、放棄する傾向がある。自分のペースでやってよい仕事で、自信の持てる課題であれば、仕事を遂行することはできるが、簡単な課題でも時間を限られると、そのことがプレッシャーになって、取り組むことができなくなってしまう傾向が示唆された。しかし、就労の場では、時間あたりの仕事量を計ることを求められるので、これを改善するための指導、もしくは本人が自分の作業特性を理解するための指導が必要である。

また、一定時間内に決められたペースで仕事をする事が苦手で、スピードをあげようとする課題への取り組みそのものを放棄してしまうタイプであることから、自信の持てることを一人で行うような仕事に向けることが好ましい。さらに、瞬時に判断をするのが苦手で、追い立てられると放棄する傾向にも注意が必要である。

② 自己理解の指導について

本人の障害受容が当面する最も大きな課題であろう。「できない」ことに対し、「頑張る」ことも重要であるが、配慮を求めていくという選択肢を今後の進路設計に加えるのは、保護者をはじめとして周囲のおとなの役割であろう。職業リハビリテーションの支援を利用することも、その選択肢の一つとして考えられる。しかし、現在の年齢からみて、職業リハビリテーション関係の相談がもっともらしい。

長期的な視野に立った計画のもとに、職業指導に関連させて障害を受容できるような指導を行っていくことが必要である。

## 第7節 まとめ

ここで、検討した事例は、通常教育を終えた時、新規学卒として就職する見通しを持つことが困難な「学習障害」児である。彼らは、入職の時点で障害受容の問題に直面することが予想される子どもである。学校在学中は教育機関に所属し、さまざまな教育形態を模索しつつ、教育の継続を図ることが可能である。しかし、新規学卒としての入職が困難であれば、一般求人によって求職活動を展開することになる。事例の中には、医療機関で診断を受けたわけではない子どもも含まれているが、ここでは、特にそのことは問題にしていない。われわれの立場が、「学習障害」を主訴として成長し、入職時に職業リハビリテーションの対象となる青年を対象としているためである。

しかし、彼らに共通する特徴が見いだされることに気づく。まずは、職業適性でいえば、運動機能群の得点が概して低い点である。しかし、能力的にみて個人内の突出して高い領域に対し、過剰期待を本人自身が持っており、それが夢や希望の形成に結びついている。一方、苦手な課題については、否定的な経験を積み重ねてきており、何らかの形で防衛機制を形成している。

次に、対人関係に不器用であるという特性の自覚は、本人自身に強くあり、場合によっては、低い自己評価に結びついている。

8例中7例まで、職業リハビリテーションの支援を利用することが望ましいといえる（事例1は、学校紹介により入職するという方向に転換した）。むろん、障害受容の問題では困難が大きい（事例6は、その後療育手帳の申請をして交付された）。その意味では、本人の自己理解（障害理解）を深めるための指導を欠くことができないが、一旦、確立したアイデンティティの再構築のための指導・援助が課題となっている（事例2, 3, 4, 5, 7, 8）。

### 【文献】

- 向後礼子 1996 非言語コミュニケーションに関する評価 『知的障害者の職業指導を支援する評価システムの開発に関する研究』第5章 障害者職業総合センター調査研究報告書No.14.
- 今野義孝・内田修・鈴木克俊 1994 ベンダー・ゲシュタルト・テストによる精神遅滞時の視-運動ゲシュタルト機能の検討-再認過程と構成過程の評価による- 特殊教育学研究, 33(2), pp.39-45.
- 日本労働研究機構 1994 新版 職業レディネス・テスト (手引)
- 労働省職業安定局 1994 労働省編 一般職業適性検査事業所用 (手引)
- 高橋省己 1985 ベンダー・ゲシュタルト・テスト ハンドブック 三京房.
- 田谷勝夫 1995 脳損傷者の注意障害 (II) 職リハネットワークNo.29, pp.34-37.